

763-37

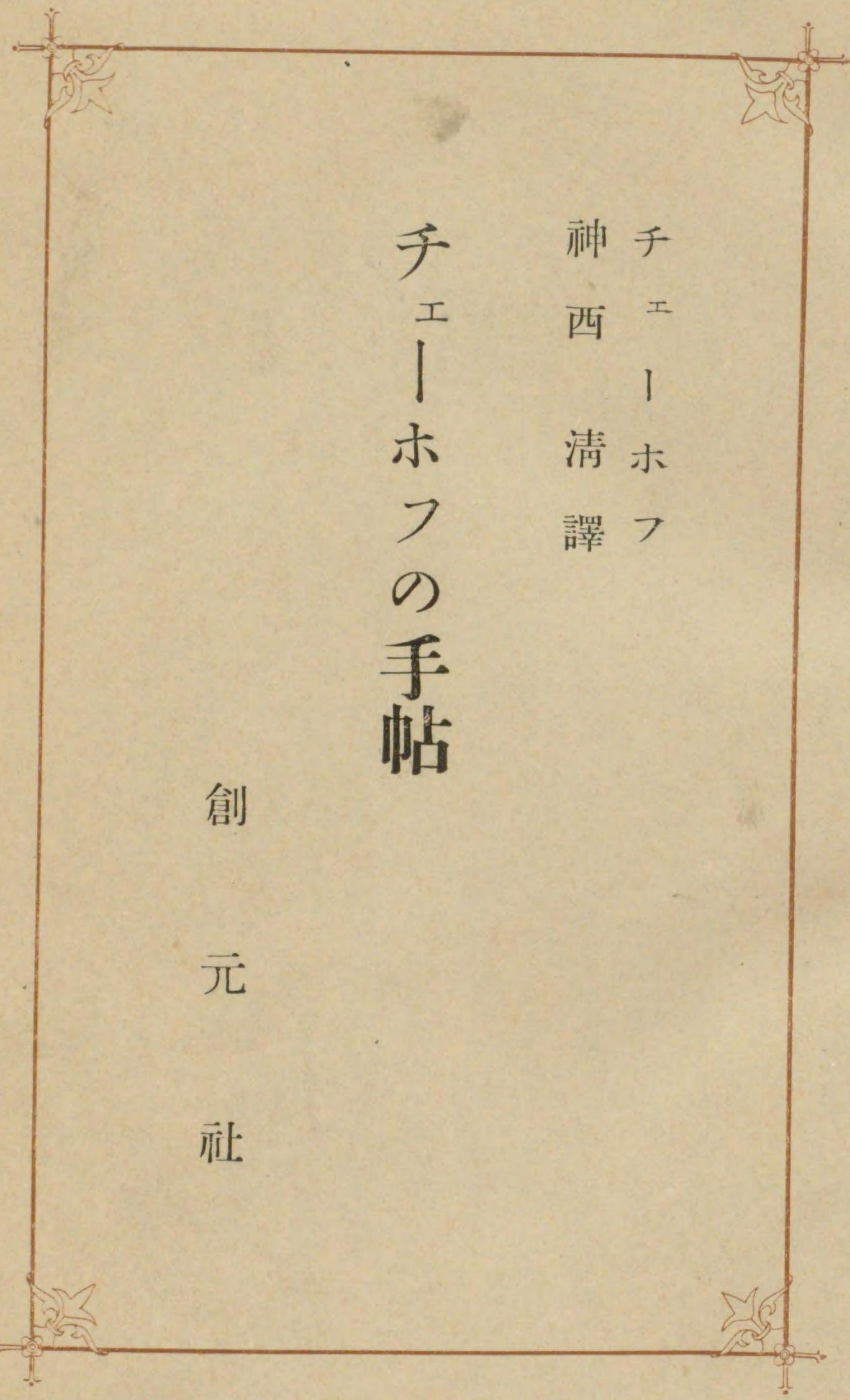


1200501597373

63
37

36.1.27

21465



チ
エ
ー
ホ
フ
神
西
清
譯

チ
エ
ー
ホ
フ
の
手
帖

創
元
社

763
37

はしがき

これは作家チェーホフの私録である。その成り立ちについて簡単に左に記す。

チェーホフの死後、妻オリガ・クニツベル・チェーホヴァの手もとに、一冊の手帖が保存してあつた。それはチェーホフが、折りにふれての感想や、将来の作品のための腹案や、スケッチや心覚えの類を、丹念に書きとめて置いたものである。なかには讀書の折りなどに彼の心を打つたと思はれる、他の作家からの抜き書きなども見受けられる。この手帖は一八九二年に始まつて一九〇四年に終つてゐる。つまり彼がサガレンの旅から歸還の後、なか一年を置いて『隣人』や『六號病室』などを書いた年を起點にして、『櫻の園』の上演によつて祝禱された彼の最後の年に及んでゐるのである。してみるとこの手記の年代は、作家としての彼の圓熟期に當つてをり、忘れがたい幾多の名作をその背景にもつてゐるわけである。

この手帖とは別に、チェーホフの遺した手稿の束のなかから、特に『題材・斷想・覺書・斷片』と表に記した紙包みが發見された。このばらばらの紙片に書き込まれ

であるものも、内容からいへば手帖と同じ性質のものである。年代的にもまづ同じ時期のものと推測される。

これらの私録をチェーホフがどんなに大切に扱つてゐたかは、彼がわざわざノオトブックを用意してその大部分を淨書してゐたことから察しのつくことである。何かの作品に織り込まれて使用済みになつた分は、彼の手で抹殺してある。尤もそれが作品の中に形を變へて導き入れられてゐる場合には、生かしてこの本にも收めてある筈である。かうした編纂者の配慮のおかげで、私たちはチェーホフの制作過程の一斑にも接し得るわけである。例へば『三人姉妹』の臺詞の草案などがその例である。

しかしこの私録がチェーホフの死後に持つ意義は、勿論そんなところにとどまつてゐるのではない。この貴重な私録は、チェーホフの發想の祕密を私たちに解體して見せてゐる。その斷ち切られた一片ごとに、チェーホフの智慧が異様な光を放つてゐるのである。

『日記』は一八九六年から一九〇三年にわたつてゐる。言ひかへると、彼が『わが生活』を書き『かもめ』を發表した年から、『許婚』や『櫻の園』を書いた年までで

ある。原本には『日記より』となつてゐて、或ひは誰かの手で抄出されたものではないかと疑はせるが、文章の姿にまでその手が及んでゐようとは考へられない。彼の手紙がひどく饒舌なのと裏返しに、彼の日記は恐ろしく簡潔なスタイルをもつてゐる。この内外両面の對照は興味ぶかいことである。この日記の性格は彼の手帖に酷似してゐる。

この手帖と日記のほかになほ一二の文獻的な資料を添へて、私は四年前にやはり『チェーホフの手帖』と題した本を上梓したことがある。書肆は芝書店であつた。今度その本の中から純粹にチェーホフの私録だけを取り出して刊行するに際してはほとんど改譯にちかい斧鉞を加へたことを申し添へたい。

稀覯の原本を貸與された伊藤職雄氏、譯者の疑問を解きつつ懇切な助言を惜しまれなかつたM・グリゴリーエフ氏の御好意に深い感謝を捧げる。

目次

はしがき……………一

手帖より……………一

題材・斷想・覺書・斷片……………一七

日記……………三七

手帖より

一八九二年—一九〇四年

人類は歴史といふものを、戦闘の系列つらなりと考へて來た。なぜなら今までは、闘争が人生の主眼だと心得てゐたのだから。

ソロモンが智慧を希つたのは、とんでもない過失だつた*。

*チエーホフの遺稿の中にソロモンの獨白を自筆で淨寫したものが残つてゐた。——

ソロモン(一人) ああ、人の世の生せいは何と暗いことだ。子供心に怖しかつた闇夜の暗さも、今の一寸先も見えぬ生き様ほどに、俺の心を怯え上らせたことはなかつた。

神よ、御身が父ダビデに授けられた能といへば、ただ言葉を音に結び合はせ、絃に合はせて御身を讃め歌ひ、甘い涙を流し、人々の眼にも涙を誘ひ、そして美に微笑みかけることでしかなかつたのに、この私にはそのうへに、何故この喘ぎ惱む魂や、眠りもやらぬ飢ゑた思念を授けられたのだ。塵から生れ出た蟲けらのやうに闇のなかに身

を滑め、絶望と恐怖とにがくがくと總身を顛はせながら、有りとある物象に解きがたい秘密を見、また聞く。この朝が来たのは何の意か？ 寺院みでらの陰から太陽が昇つて、棕櫚の樹を金色に染めたのは何の意か？ 女の美しさは何のためにある？ あの鳥はどこへ急ぐのだ？ 所詮はあの鳥も雛鳥も、また急いでゆく目當ての場所も、この俺と同じに塵ひぢと化するものなら、ああして翔ることに何の意味がある？ ああ、いつそ生れない方がましだった。それとも、眼も思念おもひも授かつてをらぬ石にでもなつた方がましだった。夜が来るまでに身體からだをへとへとに疲らせて置かうと思つて、昨日はひねもす平人足ひらのやうに、寺院に大理石を運搬して見た。それが今かうして夜になつたのに、やつぱり俺は眠れない。……もう一ぺん行つて寝て見よう。フォルゼスが言ふには、駈けて行く羊の群を心に描いて、いつまでもそれを思ひ續けてゐれば、やがて意識朦朧となつて寐入れるとのことだ。それをやつて見るとしよう。……(退場)

世間普通の偽善者は鴿を氣どるが、政界や文學界の偽善者は鷺を氣どる。しかし彼等の鷺のやうな威容に面喰ふには及ばない。彼等は鷺ではなく、たかだか鼠か犬に過ぎない。

われわれよりも愚昧で汚穢なもの、それが民衆である。行政上では納税階級と特權階級の二つに分けてゐる。しかしどんな分け方も當らない。何故ならわれわれは悉く民衆であり、われわれの爲す最も善いことは、即ち民衆の仕事だからだ。

モナコ公がルーレットを持つてゐる以上、ましてや徒刑囚はカルタぐらゐ弄んだつていい筈である。

イヴァン*は戀愛哲學を並べることができたが、戀愛はできなかつた。

君はまじまじと見よ

*チエーホフの弟。

アリヨシヤ お母さん、僕は病氣のお蔭で頭が鈍つちまつて、今ぢやまるで子供の頃みたいなんです。神様に祈つたり、泣いたり、喜んだり……。

なぜハムレットは死後に見る夢のことを苦に病んだりしたのだらう。この世に生きてゐたつて、もつと怖い夢がやつて来るのに。

娘 フェルトの長靴ぢやいけませんわ。

父 なる程これぢや見つともないな。縁を縫はせなくぢやいけないな。父親は病氣になつたので、シベリヤへ行かせて貰へない。

娘 お父さん、あなたはちつとも御病氣ぢやないのね。だつてほら、ちやんとフロックを召して、長靴を穿いて……。

父 わたしはシベリヤへ行きたいんだよ。釣竿を持つて、エニセイかオビ河の岸邊に腰をおろす。渡舟には懲役さんや移住民が乗つてゐる。……此處のものは何を見ても蟲酸が走るよ。窓のそとのあの紫丁香花^{ライラック}、砂の敷いてある小道……。

寢室。月の光が窓から射し入つて、肌着の小さなボタンまでも見える。

善人は犬の前でも恥かしさを感じることがある。

ある四等官が美しい景色を眺めて曰く、「何たる絶妙な自然の排泄作用ぢや！」

*「營み」といふつもりで生半可な術語を使った。

老犬の手記から。——「人間は料理女さんの棄てる雑水や骨を食べない。馬鹿な奴！」

彼の持つてゐるものといつたら、天にも地にも學生生活の思ひ出しかなかつた。

フランスの諺。—— *Laid comme un chenille*. * 毛蟲の如く醜し。(大罪業の如く悪し。)

*原文に *...* とある。

男が獨身を守つたり女が老嬢で通したりするのは、互ひに相手に何の興味も起させないからだ。肉體的な興味をすら。

大きくなつた子供達が食卓で宗教論をやつて、斷食とか坊主とか云つたものをこき下ろす。年寄りの母親は、初めのうちかんかんになつて怒る。そのうちに慣れたと見えて、ただにやにや笑つてゐる。やがての果てには、なるほどお前達のいふ通りだ、私もお前達のお宗旨になりますよと、だしぬけにさう言ひ出す。子供達は氣持がわるくなつた。この婆さんこの先なにをやり出すことやら、子供達には見當がつかなかつた。

國民的科學といふものはない。九九の表に國民的も何もないやうに。國民的なものは既に科學ではない。

脚グッスの短い獵犬フントが街を歩いて、自分の足の曲がつてゐるのを羞かしく思つた。

男と女のちがひ。——女は年をとるにつれて、ますます女の仕事に身を入れる。男は年をとるにつれて、ますます女の仕事から遠ざかる。

折悪しくもち上つたこの思ひがけない戀愛沙汰は、次のやうな場合にそつくりだ。——子供達をどこか散歩に連れて行く。散歩はなかなか愉快で賑やかだ。そのとき突然、一人の兒が油繪具を食べちまつた。

ある登場人物が人の顔さへ見れば言ふ、——「そりやああなた、蛔蟲むしですよ。」そして自分の娘に蛔蟲の療治をする。娘は黄色くなつた。

無能なまくら學者が二十四年間も勤續して、結局なんの貢獻もせず、御自分同様に知識の狭い無能な學者を何十人と世に送り出しただけだつた。彼は毎夜ひそかに製本をする。これが彼の眞の天職なのだ。この道にかけては名人で、深いよろこびを感じてゐる。彼のところに、學問好きの製本屋が出入りしてゐる。これは毎夜こつそりと學問をする。

コーカサス公が白い長衣を着用して、無蓋の文藝欄フイイトンに乗つて行かれた。

*馬車(フイイトン)との發音の類似から來た間違ひ。

ひよつとしたらこの宇宙は、何かの怪物の齒の中*にあるのかも知れぬ。

* 齒の間に（銜へられての意）の言ひ違ひた。

——右へ寄らんか*、この黄眼玉**め！

* ロシヤは右側通行が慣はしである。

** 冬期ペテルブルグに出稼ぎした百姓馭者の蔑稱。

——食おぼりたいのですか？

——いや、その反對です。

* これでは「吐きたい」といふ意味になつてしまふ。

腕が短かくて頸の長い懷妊みおちの奥さん、カンガルーそつくり。

人を尊敬するのは何といふ楽しいことでせう。私は本を見ても、作者がどんな戀をしたか、カルタが好きだつたかどうか、などといふことは一切氣になりません。私はただ彼の嘆稱すべき仕事を見るだけです。

戀をするならば必ず純潔な相手を選べといふのは、つまりエゴイズムです。自分にはありもしないものを女性に求めるなんて、それは愛ぢやなくて崇拜です。人間は自分と同等の者を愛すべきですからね。

いはゆる子供のやうな純な生活の悦びとは、動物的な悦びに他ならず。

私は子供の泣聲は我慢がならない性分です。しかし自分の子の泣くのは聞えませぬよ。

中學生が或る奥さんに、レストランで晝飯を御馳走する。懐中には一圓二十錢。勘定は四圓三十錢。金がないので彼は泣き出した。亭主は耳朶をつまんで引張つた。奥さんと話してゐたのはエチオピアの話だつた。

打ち見たところ、キャベツを添へた腸詰ソーセイヂのほかは一切お嫌ひらしい男。

事業の大小は懸つてその目的にあり。目的の大なる事業を大事業といふ。

ネフスキイ通りを馬車*で行くとき、左のかた乾草廣場センナヤを眺めたまへ。煤煙すす色の雲、團々たる赤紫色の落陽。ダンテの地獄だ！

*ペテルブルグの中央にある廣小路の名。

年收は二萬五千から五萬。でもやつぱり金に困つてピストル自殺を圖る。

おそろしいほどの貧乏。二途も三途も行かない。母親は後家さん。娘はひどく不器量である。遂に母親は心を鬼にして、娘に街へ出るやうに勧める。彼女はいつぞや若い頃、衣裳代を稼ぐため夫にだまつて街へ出たことがある。彼女には若干の経験があるわけである。彼女は娘に教へてやる。娘は街へ出て、夜が明けるまで歩き廻つたが、買はうといふ男は一人もない。醜女だから。二日ほどして、三人組のどこかの無頼漢が通りかかつて彼女を買つた。彼女の持つて歸つたお札をよく見たら、すでに無効になつた富籤の札だつた。

二人の妻妾。一人はペテルブルグに、一人はケルチ*に置いてある。年ぢゆう絶えない痴話喧嘩、威し文句、電報沙汰。男はいつそ自殺しちまはうかとまで考へる。やつと仕舞ひに或る策を思ひついた。二人を一緒に住まはせたのである。彼女たちは當惑して、化石したみたいになつた。黙り込んで、おとなしくなつた。

* 遙か南方、クリミヤ半島の港。

或る登場人物。とても大學に居たとは思へないほど幼稚極まる男。

そこで私は、現實だと思つてゐたことがじつは夢で、夢の方が現實なのだといつたやうな、そんな夢を見たのです。

人間は女房を貰ふと好奇心がなくなるといふことに私は氣がつかしましたよ。

幸福を知覚するには、まづ大抵は時計を巻くぐらゐの時間が要る。

驛の傍の汚ならしい小料理屋。さうした店には、きまつて白鱈魚しろてふぎめの鹽漬に山葵を添へたのがある。一體ロシアではどれほどの白鱈魚を鹽漬にするのやら！

Zは日曜になると、スーハレフ廣場*へ古本を漁りに行く。「可愛いナーヂャへ。作者よ、り」といふ獻詞のついた父親の著書を見つける。

*モスクヴァの廣場。日曜市が立つ。

ある役人が知事夫人の肖像を胸にぶら下げてゐる。七面鳥を胡桃で飼ひ肥らせて、彼女へ進物にする。

頭腦は明晰で、心性は純潔で、肉體は清楚でなければなりません。

ある奥さんが養猫場を営んでゐるといふ評判が立つた。そこで彼女の戀人は、尾を踏んづけて猫たちを酷い目にあはせた。

その士官は妻君と一緒に風呂屋へ行く慣はしだつた。そして二人とも從卒に洗ながさせるのだつた。明かに彼を人間扱ひにはしてゐなかつたので。

——そこへあの男が勳章に威儀を正して現はれたのさ。

——はてな、あの男の持つてる勳章つていふと？

——九七年の國勢調査の有功銅章だよ。

ある官吏が、全課目に五點を貰つて來たと云つて息子を打擲する。成績不良だと思つたのだ。あとで人から、それは君の方が悪い、五點は滿點だと聞かされたが、それでもまた息子を殴りつけた。今度は自分に腹が立つたので。

頗る善良な男が、岡つ引に間違へられさうな御面相をしてゐる。ワイシャツの飾ボタンを盗んだのは彼だと、皆がさう思つてゐる。

○眞面目一方の、袋みたいにすんぐりした醫者が、とてもダンスの上手な娘に戀をする。そして彼女の氣に入らうと、マズルカの稽古を始める。

雌雀には、雄雀の鳴聲がチュッチュツ囀るのではなしに、とても上手な歌に聞える。

家に引籠つて靜かな生活をしてゐると、人生は別に異状もないやうに見える。ところが一あし街へ出て、觀察の眼を働かせて見ると、例へば女に色々物を問ひかけたり見ると、人生はじつに凄慘だ。パトリアルシェ・ブルドイのあたり一帯、見かけは平穩無事

だけれど、その實あすこの生活は地獄なのだ。

*モスクヴァの公園と街の名。「僧正ヶ池」の意。

この赤い頬べたをした奥さんや老夫人たちは、湯氣が立つほど健康だ。

領地は間もなく競賣に出る。何から何まで貧乏くさい。従僕だけは相變らず道化役みた
いなお仕着せをきてゐる。

神経病や神経病患者の数が殖えたのぢやない。神経病に眼の肥えた醫者が殖えたのだ。

教養があるほど不仕合せだ。

人生は哲學と背馳する。怠惰のないところに幸福はなく、無用の物だけが満足を齎らす。

お祖父さんに魚を食べさせる。もしもお祖父さんが中毒しないで、命に別條がなかつた
ら、家ぢゆうの者が魚を食べる。

文通。青年が文學に身を捧げることを見、年中その希望を父親に書いてよこす。た
うとう役所をやめて、ペテルブルグへ出て文學に専心する。——檢閲官になつたのだ。

一等寢臺。六、七、八、九號の旅客。話題は嫁のことである。世間一般では姑しうとのことで苦勞するが、われわれインテリは嫁のことで苦勞する。

「私の長男の嫁はなかなか教育があつて、日曜學校や圖書館の世話を焼いてゐます。けれど手前勝手な、氣性の烈しいお天氣屋で、肉體的にも嫌惡を催させます。食事の時など、何かの新聞記事のことがもとで、いきなりヒステリを起したりするんです。實に思ひあがつた女ですよ。」

もう一人の嫁。——「人なかに出るとちやんとしてゐますが、家の中ちや恥もへつたくれも無い女で、煙草は喫むし、けちん坊です。お砂糖を齧りながらお茶を飲むむときなど、お砂糖を唇や齒の間に挟んだままで物を言ふんです。」

*ここまではロシア人普通の習慣。

メシチャンキナ*
Meshchanina.

*「町人女」といふ意味の女の苗字。

ロマーンは、本性は不身持の悪い土百姓のくせに、召使部屋では他ほかの者の身持を取締るのを義務と心得てゐる。

でぶでぶと肥つた小料理屋の女將。——豚と白鱈魚ていさめの混血兒あひのこ。

マラーヤ・ブロンナヤ*で。——一ぺんも田舎へ行つたことのない少女が、田舎の感じにひたつて、夢中になつてその話をしてゐる。遊歩道や梢の鳥を念頭に置きながら、人真似

鴉や大鴉や仔馬の話をしてゐる。

*モスクヴァの街の名。

コルセットをした二人の若い士官。

ある大尉が、自分の娘に築城術を教へた。

文學上の新形態のあとを追つて、必ず生活上の新形態が生じて来る(豫言する者)。だからよく保守的な人間精神にひどく毛嫌ひされるのである。

神経衰弱にかかつてゐる法律家が、片田舎の家に歸つて来て、フランス芝居の獨白を朗讀する。——朗讀はとんちんかんな馬鹿げたものになる。

人間は好んで自分の病氣を話題にする。彼の生活の中で一番面白くない事なのに。

例の知事夫人の肖像を胸にぶらさげてゐる役人は、金貸しをして、ひそかに一財産こしらへてゐる。彼が十四年間も肖像をぶらさげてゐた前の知事夫人は、今では後家になつて、病身で、その町の郊外に住んでゐる。その息子が何か手違ひをして、四千の金が要る。彼女はこの役人を訪れる。彼は夫人の話の退屈さうに聴き終つてから、かう言ふ。——
「折角ですが何のお力添へも致し兼ねますな、奥さま。」

男と交際のない女はだんだん色褪せる。女と交際のない男はだんだん馬鹿になる。

病身な宿屋の亭主が醫者に頼む——「私が病氣になつたとお聞きになつたら、お招きしなくてもどうぞ来て下さい。家の妹は吝嗇ですから、どんなことになつたつて貴方を呼びに行きはしますまい。往診料には三ルーブルお拂ひします。」一二ヶ月してから醫者は、亭主が重態だといふ噂を聞く。そこで出掛けようとしてゐると、その妹から、「兄は亡くなりました」といふ手紙がとどく。五日たつて偶然その村へ行つた醫者は、宿屋の亭主がつひその朝死んだことを知る。憤慨して宿屋へ行く。喪服を着た妹が、部屋の隅に立つて詩篇を誦んでゐる。醫者は彼女を吝嗇だ薄情だと非難しはじめ。妹は詩篇を誦みながら、二三句ごとに罵り返す。「お前さんみたいなのは掃くほどゐるよ……。何だつてのこのこやつて来たんだよ。」彼女はこちこちの舊教徒で、憎悪に燃え、凄い劍幕でがなり立てる。

新米の知事が屬僚に向つて演説をした。商人を集めて演説をした。女学校の卒業式で、教育の眞義について演説をした。新聞の代表者に演説をした。ユダヤ人を集めて、「ユダヤ人よ、余が諸君の參集を求めたのは……。」一と月たち二た月たつが仕事の方は何一つしない。また商人を集めて演説。またユダヤ人と呼んで、「ユダヤ人よ、余が諸君の參集を求めたのは……。」みんな飽々してしまつた。たうとう彼は官房の長官に言ふ、「いや君、こいつは俺の手に合はんよ。辭職しちまはう！」

田舎の神學校生徒が、ラテン語の糞勉強をする。半時間ごとに女中部屋へ駆け込んで、眼を細くして女中たちをつついたり抓つたりする。女中たちはキヤッキヤツと笑ふ。それからまた本に向ふ。彼はこれを「氣分爽快法」と名づけてゐる。

知事夫人が、例の役人を招んでチョコレートを一俵御馳走した。この聲の細い男は、彼女の崇拜者だ。(胸にぶら下げた肖像)。彼はそれから一週間といふもの幸福な気分を味ふ。彼は小金を蓄めてゐて、無利子でそれを貸してゐた。——「貴女にはお貸し出来ませんな。貴女のお婿さんがカルタで擦つてしまふでせう。いや、それだけは御免を蒙ります。」知事の娘といふのは、いつか毛皮頸巻キョウマキをして劇場のボックスに納まつてゐた女だが、その夫がカルタに負けて官金を使ひ込んだのだ。鯉コイでヴォトカをやるのに慣れて、ついぞチョコレートといふものを飲んだことのない役人は、チョコレートのお蔭で胸が悪くなる。知事夫人の顔に浮んでゐる表情、「私、可愛いらしいでせう。」身仕舞ひに大さうな金をかけて、それを見せびらかす機会——夜會の開催を、いつも待ち焦れてゐる夫人だつた。

妻君を連れて巴里へ行くのは、サモヴァル持參でトゥーラトウラ*へ行くのと同じさ。

* 歐露の都會。サモヴァルなどの金屬手工業で有名。

青年が文學界にはいつて來ないといふのは、その最も優れた分子が今日では鐵道や工場や産業機關で働いてゐるからである。青年は悉く工業界に身を投じてしまつた。それで今や工業の進歩はめざましいものがある。

女がブルジョア風を吹かす家庭には、山師やべてん師やのらくら者が育ち易い。

教授の見解。——大切なのはシェイクスピアではなく、これに加へられる註釋なり。

来るべきジェネレーションをして幸福を達せしめよ。だが彼等は、彼等の父祖が何のため
めに生き、何のために苦しんだかを自問せねばならぬ。

愛も友情も尊敬も、何物かに對する共通の憎悪ほどには人間を團結せしめない。

十二月十三日。工場の女主人に會つた。これは一家の母であり、富裕なロシア婦人だが、
ついぞロシアで紫丁香^{ライラック}を見たことがないといふ。

手紙の一節。——「外國にゐるロシア人は、間諜かさもなければ馬鹿者だ。」隣の男は
戀の傷手を癒しにフロレンスへ行く。だが遠くなるほど益々戀しくなるものだ。

ヤルタ^{*}。美貌の青年が四十女に好かれる。彼の方は一向に氣がなく、彼女を避けてゐる。
彼女はさんざ思ひ悩んだ擧句、腹立ちまぎれに彼についての飛んだ醜聞を言ひ觸らす。

*クリミア半島にある避暑地。

ペトルーシヤの母親は、婆さんになつた今でも眼を暈^{くま}どつてゐた。

悪徳——それは人間が背負つて生れた袋である。

Bは大真面目で、自分はロシアのモーパッサンだと言ふ。Sも同じ。

ユダヤ人の姓。——^{チエブチク}*Chepchik*。

*小さな頭巾。

魚が逆立ちしたやうな令嬢。口は木の洞^{うら}みたいで、つひ一錢入れて見たくなる。

外国にゐるロシア人。——男はロシアを熱烈に愛する。女の方はぢきにロシアを忘れて一向に愛さない。

藥劑士 ^{プロチヨール}*Protiur*。

*「眼を擦^こつた」といふほどの意。

^{ロキール}*Rosalia Ossipovna Aromat*。

*「花咲く小薔薇」と「芳香」を組合せた女の姓名。

物を頼むには、金持よりは貧乏の方が頼みいい。

で彼女は春をひさぐことになつて、今ではベッドの上で寝る身分だつた。零落した叔母

さんの方は、そのベッドの足もとに小さな毛氈を敷いて臥せつて、嫖客がベルを鳴らすと跳ね起きるのだつた。お客が歸るとき、彼女は嬌羞を浮べて、科を作つて言ふのだつた。「女中にも思召しを頂かしてよ。」
そして時をり十五錢玉をせしめた。

モンテ・カルロの娼婦たち、いかにも娼婦らしいその物腰。棕櫚も娼婦みたいな感じ。よく肥つた牝鶏も娼婦みたいな感じ。……

獨活の大木。ペテルブルグの産婆養成所を出て助醫の資格をとつたNは、思想のしつかりした娘である。それが教師Xに戀した。つまり彼もやはり思想のしつかりした男で、日ごろ彼女の大いに愛讀してゐる小説ごのみの刻苦精勵の人だと思つたのである。そのうち

次第に、彼が酒喰ひのらくら者で、お人好しの薄野呂だといふことが分つて來た。學校を首になると、彼は女房の稼ぎを當てにして居候暮しをやりだした。まるで肉腫みたいな餘計者で、彼女を搾り盡すのだつた。或るとき彼女は、インテリの地主一家の治療に招かれて、毎日その邸に通つた。お金で拂ふのは工合が悪いので、その家では亭主へ服を一着贈つてよこして、彼女を大いに無念がらせた。長々とお茶を飲んでゐる夫を見ると、彼女は癩癩が起きて來るのだつた。夫と一緒に暮すうち、彼女はやつれて器量が落ちて、意地の悪い女になる。地團太を踏んで、夫をどなりつける、「あたしを離縁してお呉れ、この碌でなし！」夫が憎くてならなかつた。彼女が働いて、謝禮は夫が受取るのである。彼女は縣會の醫員だから、謝禮を受ける譯には行かないのだ。知合ひの人達が亭主の人物を見抜いて呉れず、やつぱり思想のしつかりした男だと思つてゐるのが、彼女は忌々しかつた。

若い男が百萬マーク蓄めて、その上に寢てピストル自殺をした。

「その女」……「僕は二十はたちのとき結婚して以來、生涯ヴオトカ一杯飲んだことも、煙草一本喫つたこともありません。」さういふ彼が他に女をこしらへると、世間の人は反つて彼を愛しはじめ、今までよりも信用するやうになつた。街を歩いて、皆が今までより愛想よく親切になつたのに彼は氣づくのだつた——罪を犯したばかりに。

結婚するのは、二人ともほかに身の振り方がないからである。

一 國民の力と救ひは、懸つてそのインテリゲンツィヤにある。誠實に思想し、感受し、しかも勤勞に堪へるインテリゲンツィヤに。

口髭なき男子は、口髭ある婦人に同じ。

優しい言葉で相手を征服できぬやうな人は、いかつい言葉でも征服はできない。

一人の賢者に対して千人の愚者があり、一の至言に対して千の愚言がある。この千が一を壓倒する。都市や村落の進歩が遅々としてゐる所以である。大多數、つまり大衆は、常に愚かで常に壓倒的である。賢者は宜しく、大衆を教化しこれを己れの水準にまで高めるなどといふ希望を抛棄すべきだ。寧ろ物質力に助けを求める方がよい。鐵道、電信、電話を建設するがよい。さうすれば彼は勝利を得、生活を推し進め得るだらう。

本來の意味での立派な人間は、確乎として保守主義的な乃至は自由主義的な信念を抱く人々の間にのみ見出されるだらう。いはゆる穩健派に至つては、賞與や年金や勳章や昇給に著しく心を惹かれがちである。

——あなたの叔父さんは何で亡くなつたのです？

——醫者の處方はボトキン氏下劑＊を十五滴となつてゐたのに、十六滴のんだのでね。

＊極めて無害な緩下劑。

大學の文科を出たての青年が郷里の町へ歸つて來る。そして教會の理事に選舉される。

彼は神を信じてゐるわけでもないが、勤行おつとめには几帳面に出て、教會や禮拜堂の前を通るときは十字を切る。さうすることが民衆にとつて必要であり、ロシアの救ひはそれに懸つてゐると考へたからである。やがて郡會の議長に選ばれ、名譽治安判事に選ばれ、勳章を貰ひ、たくさんたくさんの賞牌を受けた。——さていつの間にか四十五年も過ぎたとき、彼ははつとして、自分がこれまでずつと身振狂言をやつて來たこと、道化人形の眞似をして來たことを悟つた。だが既に生活を變へるには晩かつた。或る夜の夢に、突然まるで銃聲のやうな聲がひびいた——「君は何をしてゐる？」彼は汗びつしよりになつて撥ね起きた。

惡には抗しえないが、善には抗しうる。

彼は坊主のやうに權門に媚びる。

死人に恥辱はない。だがひどい悪臭を放つ。

敷布シツの代りに汚ないテーブル掛。

ユダヤ人 ペルチック*
Perchik.

*小つぼけな胡椒。

俗物が會話のなかで——「そのほか何たが何たまで。」

大ていの富豪は圖々しくつて自惚れの強いものだが、その富をまるで罪のやうに背負つてゐる。もしも貴婦人や將軍が慈善の催しに彼の寄附を求めず、貧しい學生も乞食もゐなかつたら、彼は定めし憂鬱と孤獨を感じるのだらう。もし乞食がストライキを起して、一さい彼の施しを求めぬことに申し合はせたら、彼は自分から出掛けて來るに違ひない。

夫が友人たちをクリミヤの別荘へ招待する。あとで妻は、夫には黙つて勘定書をそのお客さんたちに出して、間代と食事代を受けとる。

ポターポフは兄と親交を結んで、それが妹への戀のもとになる。妻と離別をする。やが

て息子が、兎小屋のプランを送つて来る。

——僕はうちの畠に豌豆と燕麥を蒔いたよ。

——つまらんことをしたものだ。Trifolium (苜蓿) を蒔けばよかつたのに。

——豚を飼ひはじめたのさ。

——つまらん。有利でない。仔馬を飼つた方がいい。

友情に厚い少女が、非常に美しい動機から、困つてもゐない親友Xのために寄附金を募つて歩いた。

何故かうも屢々、コンスタンチノープルの犬のことを書くのだらう。

*コンスタンチノープルは野良犬の多いことで有名。

病氣。——あの男は水療法に罹つてね。

知人の家へ行くと、ちようど夜食の最中で、お客が大勢ゐる。とても賑かだ。隣り合ふ婦人連と世間話をしたり、葡萄酒を飲んだりで私は愉快だ。とてもいい気分。突然Nが検事みたいな莊重な顔附で立ち上つて、私のための乾杯の辭をやる——「言葉の魔術師よ、理想の影が朦朧と消えゆく現代に残された理想よ……願はくは聰明にして久遠なるものを種播かれんことを……」。私は、それまですつぽりと頭巾をかぶつてゐたのに、その頭巾を取られて、銃の先で狙はれるやうな氣がした。スピーチが済むと、杯を打ち合はせて、

それから沈黙。座は白けてしまった。「さあ、貴方が何か仰しやる番よ」と隣席の婦人が言ふ。だが何を言へばいいのか。私はその男に酒瓶でも投げつけてやりたかつた。で、胸の底に沈渣が溜つてゐるやうな氣持で寢床につく。「見給へ、見給へ、諸君。この席には何といふ馬鹿者がゐるのだ！」

小間使が寢床を直すたびに、スリッパを寢臺の下のすつと壁際へ投げ込んで置く。肥つちよの主人が到頭かつとして、小間使を追出さうとする。ところがこれは、肥満症を癒すためスリッパを成るべく奥の方へ投げて置くやうに、醫者が彼女に命じたものと判明した。

あるクラブで、會員一同が不機嫌だつたばかりに、さる立派な男を落選させた。そして彼の將來を臺無しにしてしまつた。

大きな工場。若い工場主が皆を「お前」呼ばはりして、學士號のある部下たちに暴言を吐く。ドイツ人の庭男だけが勇敢にも憤慨した。——「お前何を言ふだ、この金袋め！」

トラフテンズツト
Trachtenbaner といふ苗字の、ちつぽけな豆みたいな生徒。

新聞で大人物の死を知ると、そのたびに喪服を着る男。

劇場で。ある紳士が、前にゐるレデイの帽子が邪魔になるので、脱いで下さいと頼む。不平の呟き、腹立たしさ、歎願。たうとう白狀に及ぶ、「奥さん、私が作者なんですよ！——その返事、「あたし別に構ひませんわ。」（作者は人目を忍んでこつそり劇場に来てゐる）

賢く振舞ふには、賢いだけでは足りない。(ドストエーフスキイ)

AとBが賭をする。Aはその賭でカツレッツを十二皿きれいに平らげる。Bは賭金を拂はないのみか、カツレッツの代まで拂はない。

吃り吃り馬鹿げたことを喋る男と、毎日食卓を共にするのは堪らない。

まるまると肥つた、いかにも美味さうな女を見て。——こりやあ女ぢやない、満月だ！

御面相から判じると、胴着の下にどうやら鰓とつでもついてゐさうな女。

笑劇ツオドクシユイのために。——*Kapiton Ivanyeh Chiriy*。カピトーンイヴァーンイェチナチリイ*

*腫物の意。

税額査定員と内國消費税吏が、訊かれもしないのに自分の地位を辯明して言ふ——「面白い仕事ですよ。やることは山ほどあるし、何しろ生きた仕事ですからね。」

彼女は二十はたちのころZを戀してゐたが、二十四のときNに嫁いだ。戀愛ではなく、見込みをつけての結婚だつた。つまりNを善良で聡明で考へのしつかりした男と思つたのである。

N夫婦の仲は圓滿で、羨望の的になる。まったく彼等の生活は坦々と順調に流れて行く。彼女は満足で、戀愛の話が出ると、夫婦生活に必要なのは戀愛でも情熱でもなく、親しみなつく心だといふ意見をはく。ところが、不圖した拍子に心の琴線が奏ではじめて、胸のなかのあらゆる思ひが、春の氷のやうに一時にひらいた。彼女はZのことや、彼への自分の戀を思ひ出した。そして、自分の生活はほろびてしまった、もう取返しはつかない、自分是不仕合せな女だと、身も世もあらず思ひ悶えた。それもやがて忘れた。一年の後、また同じ發作に襲はれる。新年を迎へて、「新しい御幸福を」と人に言はれたとき、本當に新しい幸福が欲しくなつた。

Zが醫者のところへ行く。醫者は診察して心臓が悪いといふ。Zは急に生活法を一變して、強心劑ストロアチンを用ひ、病氣の話ばかりする。で、町ぢゆうの人が彼の心臓の悪いことを知つてしまふ。かかりつけの醫者たちもやはり、心臓が悪いと言ふ。彼は結婚もせず、素人芝居にも出ず、酒も斷ち、息をころしてそつと歩く。十一年たつてモスクヴァへ出て、大學の先生に見て貰ふ。その先生は心臓はまったく健全だといふ。Zは喜ぶ。が、早寢と靜かな歩調に慣れてしまつた今では正常の生活に戻することは出来ない。それに病氣の話をしなると今では退屈でならない。醫者たちを怨むだけで、ほかにどうしやうもなかつた。

女は藝術に魅せられるのではない。藝術の取巻き連の立てる騒音に魅せられるのだ。

劇評家Nは女優Xの情人である。彼女の祝儀興行。脚本も駄作なら演技も拙劣だが、Nはいやでも褒めなければならぬ。彼は手短かに書く、「脚本も花形女優もともに大成功。委細は明日。」最後の二語を書いて彼はほつと息をついた。翌日Xのところへ行く。女は扉をあけ、キスと抱擁を許してから、意地わるな顔をしていふ、「委細は明日！」

○
Zがキスロヴォツクか何處かの温泉場で、二十二歳の娘と一夜の縁をむすんだ。貧しい實意のある娘なので可哀相になつて、約束の金のほかに二十五ルーブルを用算筒の上に置いて、善根を施したあとのいい氣持でその家を出た。そのうちにまた行つて見ると、例の二十五ルーブルで買ひ込んだ贅澤な灰皿と毛皮帽子が目についた。娘はといふと、またしても腹をすかして、こけた頬をしてゐる。

Nは地所を抵當に貴族銀行から四分の利息で金を借りる。その金を、やはり地所を抵當に一割二分の利息を取つて貸す。

貴族だと？ やつぱり醜惡な形體と、肉體的不淨と、痰と、齒の抜けた老年と、嫌惡すべき死と——町人女も同じことさ。

Nは記念撮影のときは必ず一同よりも前に立ち、祝辭には一ばん上に署名し、記念式ではイの一番に演説をする。「ほう、スープですな！ ほう、揚菓子ですな！」と、しよつちゆう驚いてばかりゐる。

Zは來客が多いのに閉口した。そこでフランス女を傭ひ入れた。月給を出して、妾といふ觸込みで住み込ませたのである。これが婦人連に衝動を與へて——誰も來なくなつた。

Zは葬儀屋の松明擔たいまつぎをしてゐる。理想主義者である。「葬儀屋で」。

NとZとは温順しい、心の濃やかな親友同志だったが、連れだつて人中へ出ると、すぐもうお互ひに毒口を利きはじめる。——きまりが悪いのである。

愚痴。——うちの息子のステパンは身體が弱いので、わざわざクリミヤの學校へ入れてやりました。するとあの子は葡萄の蔓つるでぶたれて、そのためお尻のへんに葡萄蟲フイロクセツが付きました。今ちやお醫者様も手のつけやうがありませんの。

ミーチャとカーチャはお父さんから、石切場で岩山を爆發する話を聞いた。そこで怒り蟲のお祖父さんを爆發して見たくなつて、お父さんの書齋から火藥をフント一露封度もち出した。

それを壕一ぱいに詰め込んで、導火素ひなわを引いて、晝寢をしてゐるお祖父さんの眩掛椅子の下に装置した。ところが軍樂隊が通つたので、この計畫は辛くも實行を妨げられた。

眠りは玄妙不可思議なる自然の神祕にして、人間の凡ゆる力を心身ともに一新せしむ。

(僧正ボルフィーリイ・ウスペンスキイ『わが生涯の書』)

ある奥さんが、自分は人並外れた特別な體質の持主で、したがつてその病氣も特別なもので、とても普通の藥では間に合はないと思つてゐる。自分の息子も世間なみの子ではないから、特別な育て方をしてやらなければならぬと思ふ。世間のしきたりを認めない譯ではないが、それは一般の人が守るべきもので、彼女にだけは當て嵌らないと考へてゐる。自分だけは例外的な條件のもとに生きてゐるからである。息子が大きくなつたので、彼女

は何か特別な嫁を捜してあるく。まはりの者が迷惑する。息子は出来損ひだつた。

憐れむべき多難の藝術よ！

「奥さん、ほら天童ケルビムを擔いで來ましたよ！」（教會の旗）。

*旗には天童の像がついてゐる。それを洒落れて言つた。

自分が幽霊だと思つて氣が狂つた人。夜更けになると歩き廻る。

ラヴローフ型のセンチメンタルな男が、甘い感動にひたりながら、こんなことを頼む、
「ブリャンスクの叔母さんに手紙をやつて下さい。とても可愛い人ですよ……」

納屋はいやな臭ひがする。十年前に草刈人夫が寢泊りして以來、この臭ひがついた。

士官が診察して貰ひに來る。お金が盆の上に載つてゐる。患者がその盆から二十五ルーブル取つて、それで拂ひをしたのを、醫者は鏡の中でちやんと見てゐる。

ロシヤは官立の國だ。

Zは陳腐なことばかり言ふ。「若熊のやうな敏捷さで。」また、「人の痛い所を。」……

貯金局。そこに出てゐる役人は非常にいい男だが、貯金局を輕蔑して無用の長物だと思つてゐる。——そのくせやつぱり勤めてゐる。

急進的な婦人。夜なかに十字を切る。内々たくは色々な偏見で一ぱいで、人しれず迷信家である。幸福になるには夜なかに黒猫を煮るがいいと聞く。猫を盗んで、夜なかに煮ようと試みる。

出版者の創業二十五年祝賀會。感涙、演説——「文藝基金として金十ルーブルを義捐つ

かまつり、その利子を貧苦に悩む作家に授與いたさうと存じます。但し授與規定の作成のため、特別委員會を指命致したく存じます。」

彼はルバトシカ一枚で押通して、上衣を着てゐる人間を輕蔑した。そんな國粹主義は、ズボンで甘酒つくを製つくるのも同じだ。

まるで患者が温浴をしたあとの牛乳で製つたやうなアイスクリーム。

見事な建築用材の森があつた。林務官が任命された。——すると二年後には森はもうない。蠶の蛾が發生して。

X曰く、「クヴァスをやつたら腹の中がコレラみたいな騒ぎを起しちまつて。」

*ライ麥製の無色飲料。

一作づつ切り離して見ると光つてゐるが、全體として見ると頼りない作家がある。一作一作には何の特異さもないが、全體として見ると頼もしく光つてゐる作家もある。

Nが女優の家の呼鈴を押す。おろおろして、動悸が打つて、たうとう怖氣づいて逃げだす。女中が開けて見ると誰もゐない。彼はまたやつて来て呼鈴を押す——が、やつぱり上り込む決心がつかない。擧句のはてに門番が出て来て彼をどやしつけた。

おとなしい物靜かな女教師が、内證で生徒をぶつ。體刑の利き目を信じてゐたから。

N曰く、「犬ばかりぢやなく、馬までが吠えました。」

Nが嫁を貰ふ。母親と妹は彼の妻に無數の缺點を見出して、とんだ嫁を貰つたと嘆く。三年か五年してやつと、彼女も自分たちの同類だと納得がゆく。

妻が咽び泣いた。夫が肩をつかんで揺すぶると、彼女は泣きやんだ。

結婚すると、彼には政治も文學も社會も、一切が今までほど面白く思へなくなつた。その代り、妻や赤ん坊に關するあらゆる些事が、非常に重大なものになつて來た。

○ 「なぜお前さんの歌はそんなに短いのか？—と或るとき小鳥にたづねてみた、「もしや息いきが続かないのぢやないのか？」

「私には歌がとても澤山あるのです。それをみんな歌つてしまひたいので。」

—アルフォンス・ドードー

犬が教師を憎む。彼に吠えつてはいけなひと言はれたのだ。犬は見上げて、吠えずに口惜し涙を流す。

信仰は精神のはたらきだ。動物には信仰はない。野蠻人や未開人にあるものは、恐怖と疑惑である。信仰に達し得るのは高尚な組織體だけだ。

死は怖ろしい。だが、永劫に生きて決して死ぬことがないを意識したら、もつと怖ろしくことだらう。

▽ 公衆が藝術に於いて愛するのは、何よりも先づ俗なもの、とうに彼らが知つてゐるもの、慣れてゐるものである。

リベラルで、教育もあり、年も若い、そのくせ吝嗇な学校の主事。毎日學校へやつて来て、長廣舌をふるふが、お金と來たらびた一文も出さない。學校はぐらぐらで今にも倒れさうだ。しかも彼は、自分が必要且つ有用な人物だと心から思ひ込んでゐる。教師は彼を憎んでゐるが、當人はそれに氣がつかない。害毒は實に甚だしい。或る日教師は堪忍袋の緒が切れて、怨恨と嫌惡に燃える眼で睨みつけながら、思ひきり惡罵を浴びせかける。

教師曰く、「プーシキンの百年祭をする必要はないです。彼は教會に何の貢獻もしませんでした。」

ギタローツヤ
Gitarova 嬢(女優)。

オプチミストになつて人生を知得したいなら、他人の言ふこと書くことを信ずるをやめよ。自ら觀照し、自ら究め探れ。

ある夫婦が生涯 X (イクス) の説を熱心に信奉して、公式のやうにそれに則つて自分の生活を樂いた。そして死ぬ間際になつて、はじめて自分の胸に問うてみた——「ひよつとしたらあの説は間違つてゐはしなかつたか知ら? *Mens sana in corpore sano* (身健則心明) といふ諺は、嘘つばちぢやなかつたか知ら?」

私の嫌ひなもの——陽氣なユダヤ人、急進論者のウクライナ人、酔ひどれたドイツ人。

大學はあらゆる才幹を養成する。但し鈍才をも含む。

これに鑑みまして、足下よ。事情みぎの如くでありますので、足下^{*}よ。……

*原文には *My dear Sir* を *mydear* とでも略したほどの可笑味がある。

最もやりきれない人種は、田舎の名士なり。

われらの不真面目なる性情により、われらの大多数が人生現象を洞見し熟考する能力と習慣を缺くことにより、「ちえつ、下らない！」との言の頻繁に發せらるることわが國の

如きを見ず。かくも安易に、屢々嘲笑を以て、他人の功績乃至は眞摯なる問題に對すること、わが國の如きを見ず。また一面、權威の名の重んぜらるること、幾世紀にわたる奴隸の境涯によつて卑屈となり自由を怖るる、われらロシア人に於けるが如きを見ず。……

醫者が商人（それも教育のある——）に、肉汁とチキンを勧めた。商人はてんから茶化してかかつた。先づ晝飯に野菜スープと仔豚を食べて、それから醫者の命令を思ひ出しでもしたやうに肉汁とチキンを命じ、これもぺろりと平らげた。とても滑稽だと思ひながら。

修道司祭^{イエロモナフ}のエパミノンド神父は、魚を釣つてポケットに入れて置く。家に歸つて食べたくなると、一尾づつポケットから出して揚げる。

貴族Xは、家具も備品も一切つけて領地をNに賣つて置きながら、何から何まで竈の風戸^{かぜ}まで浚つて行つてしまつた。それ以來Nは、貴族と名のつくものは一切嫌ひになつた。

金持のインテリXは農民の出だつたが、手を合はさんばかりに息子に頼んで曰く、「ミ
ーシャ、自分の身分を變へるなよ！ 死ぬまで百姓であるがいい。貴族にも商人にも町人
にもなるなよ。今ぢや郡會の役人に百姓を處罰する権利が出来たといふ話だが、そんなら
それで勝手に權能を持たせて處罰させて置け。— 彼は百姓の身分を誇りにして、尊大でさ
へあつた。

ある謙遜な男のために祝賀の催しがあつた。一同はいい機會とばかり、てんでに自己誇
示やお互ひ同志の褒めつくらで時を忘れた。食事も終らうといふ頃になつてやつと氣がつ
いてみると——當の御本尊を招ぶのを忘れてゐた。

可愛らしい物靜かな奥さんが、激怒のあまりこんなことを言つた。——
「もし私が男だつたら、あいつの横面を張り倒してやるんですのに！」

回教徒は魂の救ひのために井戸を掘る。私達も銘々に、生涯が跡形もなく永劫の中へ過
ぎ行かぬため、學校か井戸か、何かそんなものを遺すことにしたらさぞいいだらう。

われわれは卑屈と偽善とでへとへとになつてゐる。

犬に着物を食ひ破られたことのあるNは、今でも何處かへ這入るたびにかう訊く、――
「ここには犬はゐませんか？」

ピョートル デニヤースイチ イストーチニコフ*
Peter Demianych Istochnikov.

*源泉または名人の意。

グレン ポルカトイツキイ*
Grush 氏 Polkatskiy 氏。

*「梨」カトイク（有名な煙草製造者の名）の半分の意。

男妾を職業とする若い男が、精力を保つため大蒜ソースを常用する。

学校の主事。鰥夫ぐらしの司祭が、手風琴を鳴らしながら、『聖者には靈の安息！』を
歌ふ。

のばしちやふぞ！

*「のしちやふぞ！」の言ひ違ひほどの可笑味。

七月には高麗鶯が朝いつばい歌ふ。

「^{シガー}Sigar (鮭) 豊富に取揃へ」——毎日街を通るたびにXはさう讀んで、一たい鮭だけで店が立ち行くものか、誰が鮭を買ふのかといつも不思議に思つてゐた。三十年たつてからやつと、氣をつけて正しく讀んだ、「^{シガール}Sigar (葉卷) 豊富に取揃へ。」

技師の眼にうつる賄賂。——百圓札の一ぱい詰つたダイナマイトの筒。

「あたくし、スペンサーを讀んだことがありますのよ。どんな事を書いてゐるのか話して下さいな。一たい何に就いて書いてゐますの?」「あたくし、巴里の展覽會に壁間畫^{ベノナ}を出品しようと思ひますの。題材を下さらない?」「うるさい奥さん。」

労働をしない人々、つまりいはゆる支配階級は、長いあひだ戦争なしでは居られない。戦争がないと彼等は退屈になる、安逸に倦んでいらして来る。何のために生きてゐるのか分らなくなり、共喰ひをしたり、せいぜい不愉快な悪口を、なるべく後の祟りのないやうな言ひ方で浴びせ合ふのに懸命だ。なかで最も優秀な分子は、お互ひ同志にも自分自身にも飽きが來ないやうに、精根をつくすのである。ところが戦争が始まると、みんな吾を忘れて熱狂して、共通の不幸によつて一致團結する。

不貞をはたらいた妻は、大きな冷えたカツレツだ。誰かほかの人の手に握られたに違ひないので、觸^{さば}る氣がしない。

ある老嬢が、『敬虔の電車*』といふ論文を書く。

*古臭い敬虔と近代的な電車の対照から来る可笑味。

ルイツェボルスキイ、トツビチ、グレムーレン、コフチン、
Rytsebovskij, Tobich, Gremulin, Koptin.

*「騎士の格闘」「乞食の負袋」「轟く」「煤ける」。

彼女の顔には皮膚が足りなかつた。眼をあくには口を閉ぢなければならぬ。及びその逆。

彼女がスカートをもち上げて、しやれたペチコートを見せると、男に見られつけてゐる女のやうな身装みなりをしてゐることがわかる。

Xが理窟をこねる。——「たとへば鼻ノーズといふ字をとつて見給へ。ロシアぢや君、この字は尾籠千萬にも、謂はば不體裁な肉體の一部を意味するね。ところがフランスぢや、婚禮といふ字だぜ。」そして實際、Xにあつては鼻は不體裁な肉體の一部だつた。

お嬢さんが嬌態しなをつくつて、こんなお喋りをする、「みんな私のことを怖がつてゐますの……世間の男も、風かぜも……。ああ、もう何も仰しやらないで！ あたしお嫁になんか決して行きませんわ！」家はといふと貧乏で、父親は大酒飲みだ。もし人が、彼女が母親と一所懸命に働いて、父親のことを人前に隠さうと骨を折るのを見たら、彼女に對する深い尊敬の氣持で一ぱいになるだらう。同時にまた、彼女がなぜ貧乏や勞働をそれほど恥かしく思つて、あのお喋りを一向に恥ぢないのか、不思議な氣がするだらう。

レストラン。自由主義的な話はずんでゐる。温厚なブルジョアのアンドレイ・アンドレイチが急にこんなことを言ひ出す——「妙な話ですが、これでも私はアナーキストだつたことがあるんですよ！」みんなびつくりする。A・Aの話。——厳格な父親。その田舎町に徒弟學校が出来たが、職業とは何ぞや教育とは何ぞやなどといふお談義に夢中になつて、何一つ教へては呉れず、だいいち何を教へたらいいかも見當がつかなかつた。(だつて町ぢゆうの人を靴屋にしたら、誰が靴を注文するものですか。) 彼は學校を追ひ出された。家からも追ひ出された。地主邸の執事の助手に住込んだ。金持や飽食の徒や肥つちよが癩に障つて來た。地主が櫻の木を植ゑた。A・Aは手傳ひをしてゐるうちに、手もとが狂つた振りをして、シャベルでその生白い肥つた指をばらばらにしてやりたくて堪らなくなつた。そこで眼をつぶつて力一ぱいに打ち下したが、外れてしまつた。それから出て行つた。森、野原の静寂、雨。温かい場所が戀しくなつて、叔母さんの家へ行つた。叔母さんは輪形パンでお茶を御馳走して呉れた。すると、アナーキズムは消えてしまつた。……話が濟んだとき、卓子の傍を四等官のLが通り過ぎる。それを見ると、A・Aは直ぐさま起ち上がる。それからLが家作持であることなどを説明する。

——私は仕立屋へ徒弟奉公に出されました。親方が裁つて呉れたズボンを、私が縫ひはじめたところが、側條わきすぢが曲がつちまつて、それこんな工合に膝のところへ出てしまひました。そこで指物師の所へ奉公にやられました。或るとき鉋を使つてゐると、手が滑つた拍子に鉋が窓へ飛んで、硝子が割れました。——その地主はレット人で、栓抜きシトボルといふ名でした。今にもめくばせをして、「ええおい、一杯やりてえなあ！」とでも言ひ出しさうな顔つきをしてゐました。毎晩一人で飲んでゐましたつけが、それが癩に障つて來ました。

クヴァス販賣商が、王冠印のレットルを貼つてゐる。Xはそれを見て、癩で業腹でならない。商人の分際で王冠を篡奪しやがつてと思ふと、居ても立つても居られない。Xは法廷へ訴へ出たり、誰かれ問はずつき纏つたり、返報の手段をさがしたりしてゐるうちに、心痛と過勞がもとで死ぬ。

家庭教師をかう言つてからかふ、「マダム・手眞似」。

シャフチュルイギン ツアマムビゼプリムキイ ハツインチエトカ チエモウラクリヤ
Shapcherygin, Tambizebul'skiy, Sunchutka, Chemouraklia.

老年の尊大さ、老年の厭人主義。輕蔑されてゐる老人を私は何人見て來たことだらう！

晴れ渡つた嚴寒の日に、卸したての櫛に敷物を掛けて届けて來るのは實にいい氣持だ。

XがN町に赴任して來た。彼は暴君のやうに振舞ふ。自分以外の人^もが成功^もるのを喜ばない。第三者がゐると態度が變る。女の姿が見えると聲の調子が變る。葡萄酒を注ぐときは、先づ瓶^{びん}の頸のところを自分のコップにちよつぱり注いでから、同席の人達に注ぐ。婦人と散歩するときは腕を支へる。つまり何かにつけて教養を見せようとするのである。他人の洒落には決して笑はない。——「もう一度言つて見たまへ。」「その手は古いな。」人の顔さへ見ればとつかまへて一席講話をやるので、みんなが飽々してしまつた。老夫人連が「獨樂」と綽名をつけた。

立居振舞も、部屋へ這入るときの作法も、物の問ひ方も、何一つ知らない男。

ウチエジメイ
Utyuchnyi 氏。

* 熨斗といふ字から作る。

問はれもせぬのにしよつちゆう先手を打つ男。——私には梅毒はありません。私は正直な男です。家内も正直な女です。

Xは一生涯、召使の風紀頹廢や、その矯正法や抑制法のことばかり、話したり書いたりした。そして、自分の家の従僕やコック女を除いて、ほかの誰からも見棄てられて死んだ。

小さな娘が有頂天になつて自分の叔母さんのことを、——「うちの叔母さんはとても美人よ、美人よ、家の犬^{うち}みたいに美人よ！」

マリヤ イヴァノヴナ コロトフキナ*
Maria Ivanovna Kolotchkina.

*「攪拌棒」、或ひは「やりきれぬ女」。

戀文の一節。——「お返事の切手を同封しました。」

優秀な人たちが農村から都會へ出てくる。だから農村は疲弊しつつあるのだし、今後も疲弊を續けるであらう。

パーヴェルは四十年の間コックをしてゐた。しかも自分の作つたものは食はず嫌ひで、

ついぞ口に入れたことがなかった。

保守的な人達が害毒を流すことが極めて少ないのは、彼等が臆病で、自己に確信をもつてゐないからである。害毒を流すのは保守主義者ではなく、心の荒んだ人達である。

女への戀が冷める。戀から解放された感情。やすらかな気分。のびのびと安らかな想念。

どつちか一つ。——馬車に乗つてゐるか、それとも降りちまふか。

戯曲のために。——自由主義の婆さんが若づくりをする、煙草をすふ、話相手なしでは居られない、情深い。

特別寢臺の乗客——それは社會の屑だ。

あそこにあるのは黒土帶人^{チエルノシヨム}です。つまりレーピンの^{*}『ザポログ人』です。

^{*}ロシアの人物畫の大家。「スルタンへの國書をしたためるザポログ人」はその傑作の一つ。

奥さんの胸に、肥つたドイツ人の肖像がぶら下つてゐる。

一生涯、選挙のたびに左派に投票した男。

死人の着物を脱がせた。けれど手袋を脱がせるひまがなかつた。手袋をした屍體。

地主が食事をしながら自慢する、「田舎は暮らしが安いですよ。——鶏も自分のだし、豚も自分のだし。——暮しが安いですよ！」

税關吏が職務を愛するのあまり、政治上の不穩文書を搜して、旅客の持物を残る隈なく

検査する。これには憲兵までが憤慨してしまふ。

眞の男性 (*muzhchina*) は、夫 (*muzh*) と官等 (*chin*) とより成る。

教育。——「よく嚼むんだよ」とお父さんが言ふ。そこでよく嚼んで、毎日二時間づつ散歩をして、冷水浴をした。だがやつぱり不仕合はせな無能な人間が出来あがつた。

商工業的醫學。

四十歳のNが十七になる少女と結婚した。第一夜、彼は彼女を炭坑町へ連れて歸つた。彼女は床にはいると、彼を愛してゐないと言つて急に泣き出した。善人のNは狼狽して、悲哀に胸をつまらせて、書齋へ寢に行く。

むかし莊園のあつた場所には、その跡形も残つてゐない。ただ一つ紫丁香花の叢^{ライラック}だけはそつくり残つてゐるけれど、どうしたわけか花が咲かない。

息子 今日木曜でしたね。

母 (聞き取れずに) え?

息子 (怒つて) 木曜ですよ! (靜かに) お風呂にはいらなくちや。

母 え?

息子 (ぶりぶりして、憤然と) お風呂ですよ!

Nは毎日Xの家へ行く。色んな話をしてゐるうちに、心から彼に共鳴してしまふ。と急にXが、居心地のいい自分の家を出て他所^{よそ}に移る。Nは彼の母親に、どうして移つたのかと尋ねる。「貴方が毎日いらつしやるからですよ」と母親が答へる。

いとも詩的な婚禮だつたのに、やがて——何といふ馬鹿ども、何といふ餓鬼ども!

愛。それは昔は大きかつた。何かの器官が退化した遺物か、それとも將來何か大きな器官に發達すべきものの細胞か、そのどつちかである。現在のところそれは、満足な働きを

せず、ひどく期待はづれな結果をしか與へない。

大さう知識のある男が、一生のあひだ催眠術だの降神術だのと嘘をつきとほす。人もそれを眞に受ける。——いい男のだが。

一幕目で立派な紳士のXが、Nから百ルーブル借りる。そして四幕を通じて返さない。

お祖母さんには息子が六人と娘が三人あるんです。ところでお祖母さんが誰を一番可愛がつてゐるかといふと、いま監獄にはいつてゐる飲んだくれの出来損ひなんです。

神父 イェロヒロマンディット*
Ierohirmandrit

* *Iera*(司祭) + *Arhimandrit*(掌院)

工場の支配人のNは、若くて財産もあり妻子もある、幸福な男だったが、『X水源の研究』といふ論文を書いて大いに好評を博した。或る學會の會員として招かれたので、職務を抛つてペテルブルグへ出て、妻君を離別し、身代限りをし、たうとう死んでしまった。

——(アルバムを見ながら) この醜面しやつらは一たい誰です？

——それ、叔父さんですわ。

ああ、戦慄すべきは骸骨ではなくて、私かもはや骸骨に恐怖を感じないといふ事實だ。

良家の少年が、我儘で悪戯ついで強情で、家内ぢゆうの頭痛の種だつた。父は官吏でピ
アノを弾く男だが、息子に愛憎がつきて、庭の奥へ連れて行つて殴りつけた。そのときは
いい氣持だつたが、やがて厭な氣持がして來た。息子は士官になつたが、何事にも嫌惡を
感ぜずにはゐられなかつた。

Nが長いあひだZの愛を求めてゐる。彼女は非常に信心ぶかい娘。彼が結婚を申込んだ
とき、彼女はいつか彼から贈られた乾枯びた花を、祈禱書のなかに挿んだ。

Z——町へ行くんなら、序でにこの手紙を郵便函へ抛り込んで呉れ。

N——(頓狂に) 何處へですつて? 何處に郵便函があるんだか知りませんね。

Z——それから藥種屋へ行つて、ナフタリンを買つといで。

N——(頓狂に) 忘れますね。そのナフタリンといふなあ。

海上の暴風。法律家の眼には犯罪と映じるに相違ない。

Xが友人の領地にお客に行つた。素晴らしい領地だが、従僕たちはXを冷遇した。友人
は彼を大人物扱ひにして呉れるが、居心地の悪いこと夥しい。コチコチの寢床で、寢間着
も出してないが、請求するのは何となくてれくさかつた。

私の姓は *Kuivisyu* ぢやありません。 *Kuivisyu* ですよ。*

*それぞれ「牝鶏」と「喫煙」の派生語。

稽古。

妻 『パリアッチ』の節はどうでしたかしら。ミーシャ、ちよつと口笛でやつて見てよ。
夫 舞臺ぢや口笛は禁物だ。舞臺は——お寺だよ。

コレラが怖くつて死にました。

追善供養に釘を持ち出すが如し。(不似合ひの譬へ。)

千年の後、ほかの遊星の上で、地球について交はされる會話。——「ねえお前、あの白
い樹をおぼえてるかい……。」(白樺)

アナフテマ*
Anakthema!

* *Anathema* (呪詛の語)の發音違ひ。

ジグザク *Zigzagovskij*, オスリツイン *Ostitsyn*, スヴィンチエトカ *Svinchutka*, チエルバルイギン *Derbalysin*.*

*「ジグザク」「牝驢馬」「小豚」「法螺吹き」

お金を持った女。ところ嫌はずに藏しまひ込んである。頸筋にも脚の間にも。……

ク・ク・ク・ハ・ハ・ハ・ハ!

かうした一切の手續け*。

*但し原語には、英語の *Procedura* を勘違ひして *Practica* と言つたほどの可笑味がある。

總べてかういふこと（解雇の件）は、大氣の現象ぐらゐの氣持でやりなさい。

醫師會議のときの會話。第一の醫師がいふ、「どんな病氣でも鹽で癒ります。」第二の醫師（これは軍醫）がいふ、「どんな病氣でも鹽を斷てば癒ります。」第一の醫者は自分の妻を例に擧げる。第二の醫者は娘を例に擧げる。

母親は思想のしつかりした婦人。父親も同じ。二人とも講義を受持つてゐる。學校、博物館、等々。夫婦はお金をためる。ところが子供達は凡くら揃ひで、金をどしどし使ふ、相場をやる。……

Nは十七の年にドイツ人に嫁いだ。夫に従つてベルリンへ行つて住んだ。四十歳で後家になつた時には、ロシヤ語もドイツ語も碌に話せなくなつてゐた。

その夫婦は客好きだった。客がゐないと夫婦喧嘩がはじまるから。

そりやアブサードな話ですな！ そりやアナクロニズムですな！

「窓を閉めなさい！ 汗を掻いてるぢやありませんか！ 外套を着なさい！ オーヴァ
シューズを穿きなさい！」

時間が足りなくて困るやうになりたかつたら、何んにもせずに見たまへ。

俺もさんざ向ふ見ずをやつて来たが、そろそろ娑婆ともお別れらしいぞ。

夏の朝、日曜日、馬車の音がきこえる。あれは彌撒ミサに出かけたのだ。

彼女は生れて初めて手に接吻された。すると彼女は堪らなくなつて、夫への愛が冷め、
「脱線して」しまった。

何と妙たなる名よ。聖母の涙、駒鳥、鴉の眼。……

* いづれも花の名。

肩章をつけた林務官、生れてこのかた森を見たこともない。

その紳士はマントン(南佛)の近くに別荘を持つてゐる。それは、トゥーラ縣の領地を賣つた金で買ひ入れたのだ。その彼が、所用でハリコフにやつて來たとき骨牌で負けて、この別荘を人手に渡すのを私は目にした。それから鐵道に勤めて、やがて死んだ。

晚餐のとき美人を見て、噎せてしまつた。やがて別の美人を見て、またもや噎せてしまつた。そんな工合で晚餐ができなかつた。美人が大勢ゐたので。

大學を出たての醫者が、レストランの監督をする。「醫師監督御料理。」彼はナルザン鑛水の成分を筆記する。學生達の信任を得て、店は繁昌する。

あの人は食べたのではない、味つたのだ。

女優の夫。妻の祝儀興行のとき、得意満面でボックスに納まつて、ちよいちよい起ち上つてはお辭儀をした。

O・D伯爵家の晝餐。肥つて、さも大儀さうな從僕たち、不味いカツレツ。金はあり餘つてゐながら、何か出口のない袋小路の感じ、家風しきたりに縛られて動きのとれない感じ。

郡醫が言ふ、「醫者でなくて、誰がこの天氣の悪いのに出歩くものですか。」——これが自慢で、人の顔さへ見れば愚癡をこぼし、自分の勤めほど面倒な職業はこの世にあるまいと鼻高々である。酒は飲まず、屢々醫學雜誌にそつと投稿するが、載つた例しはない。

Nの夫は陪席検事を振り出しに、地方裁判所の判事を経て、やがて控訴院判事になつた、平均點の上でも下でもない、面白味のない男である。彼女は夫を熱愛する。息を引取るその時まで愛しつづける。夫の不行跡が耳にはいると、柔しいいぢらしい手紙を書く。臨終のときも、いぢらしい愛の表情を浮べて死ぬ。彼女は明かに夫を愛してゐたのではなくて、もつと高尚で立派な、存在しない誰かしら他の人を愛してゐて、この愛を夫に注いだのである。やがて彼女が死んだあとで、その家には彼女の足音がきこえた。

彼等は禁酒會員だけれど、ときどき小さなグラスで一杯だけやる。

眞實は最後の勝利者だと人は言ふ。だがこれは眞實ではない。

賢者は言ふ、「これは嘘だ。だがこの嘘がないと民衆は生きて行けないし、またこの嘘は歴史的に神聖化されてゐるのだから、いま直ちにこれを撲滅するのは危険だ。まあ幾分の修正を施すぐらゐるところで、當分は放つて置く方がいい。」天才は言ふ、「これは嘘だ。だから存在してはならぬ。」

エム
M. I. Kladouvaia* 夫人。

*お蔵、物置き。

口髭を生やした中學生が、氣取つて片足だけ軽くびつこをひく。

年功だけの無能な作家が、まるで高僧みたいな威嚴をつくつてゐる。

X町のN氏とZ夫人は、ともに聰明で教育のある自由主義的な人で、ともに隣人の福祉のために働いてゐる。しかし二人は殆んど未知の間がらで、口を開けばきつと互ひに他を嘲笑して、愚昧で粗野な大向ふを喜ばせるのだつた。

彼はまるで誰かの髪をひつ掴むやうな手附きをして、かう言つた、「どつこい、かうなつたらもう逃がさんぞ。」

Nは田舎へ行つたことがないので、田舎では冬になると通行はすべてスキイに限られてゐるものと思つてゐる。「ひとつスキイの快味を満喫して見たいものですなあ！」

N夫人は操を賣つてゐる。誰の顔を見てもかう言ふ、「他のみなさんと異つてるから、貴方が好きだわ。」

インテリ婦人、いやもつと正確にいへばインテリ社會に屬する婦人は、虚言癖をもつて秀でてゐる。

Nは或る病氣の研究、その病原菌の研究に一生のあひだ苦闘した。彼はこの闘ひに生涯を捧げ、あらん限りの力を盡した。やうやく死期が迫つたところ突然、この病氣は決して傳染するものではなく、ちつとも危険ではないことが分つた。

劇團の座頭兼舞臺監督が、寢床の中で新作の脚本を読む。三四頁讀むと愛憎が盡きて、床に叩きつけ、蠟燭を消して毛布にくるまる。暫くすると思ひ直して、また脚本を拾つて讀みはじめ。やがてまた、だらだらした無能な作品に腹が立つて、また床に叩きつけ、また蠟燭を消す。暫くするとまた讀みだす。……やがて上演したら、散々の不評だつた。

Nは氣むづかしい陰氣な重苦しい男だが、それでゐてこんなことを言ふ、「私は冗談が好きですよ。いつも冗談ばかり言つてゐます。」

妻は小説を書く。それが夫の氣にくはない。だが氣持のこまやかな男なので、それが言ひ出せず、死ぬまでそれで悩み通す。

女優の運命。——はじめは、ケルチ（クリミヤの町）の裕福な良家の娘、生の倦怠、何か満ち足りない心境。——舞臺に立つ、慈善事業、燃えるやうな戀、やがて情人達。——最後に、毒を仰いで自殺を圖る、未遂。それからケルチ、肥つた伯父の家での生活、孤獨の

愉しさ。女優には酒も結婚も妊娠も禁物だといふことを、彼女はしみじみと悟る。演劇が藝術になるのはまだまだ未来のことだ。今のところは未来のための闘ひのみ。

（憤然と訓戒口調で）「なぜ俺に、お前の女房の手紙を読ません？ 親類ではないか。」

神よ、願はくは我をして、自ら知らずまた解さぬことを非難し或ひは語らしめ給ふな。

なぜみんな弱者だの陰氣者だの不道德漢ばかり描くんでせうな？ さう言つて、強者や健康者や面白い人間だけを描けと忠告する時、人は暗に自分自身を指してゐるのである。

戯曲のために。——何といふことなしに嘘ばかりついてゐる男。

補祭 カタコンボフ*
Katakombou.

*地下の納骨所。

文藝批評家N・N。尤もらしい、自信たつぷりの、非常にリベラルな男だ。彼が詩の話をする。彼はすぐに相手の説を認める、なるほど仰しやる通りでと言ふ。——天分の少しもない男だなど云ふことが、私にはすぐ分つた（私は彼のものは讀んだことがない）。誰かが、アイ・ペトリ（クリミヤの山）へ行かうと言ひ出す。雨が降りさうだからと私は反対したが、やつぱり出掛けることになる。泥濘の道、雨が降り出す。批評家は私の隣に腰か

けてゐる。私は彼の無能さを感じる。連中は彼にお世辭を使つて、僧正のやうに持ち上げる。歸り途は晴れたので、私は徒歩で歸つた。何と人々は好んで自己偽瞞をやりたがることだらう。何と彼等は豫言者や占者が好きなのだらう、まったく何といふ衆愚どもだ！まだそのほかに、一行のなかには中年の勅任官がゐた。彼が沈黙を守つてゐたのは、自分を正しいと考へて、その批評家を輕蔑してゐたからであり、また同じく天分がないからでもある。利口な人達と同席してゐるので、微笑わらふまいとするお嬢さん。

アレクセイ、イウアーヌイチ、プロフラヂーテリヌイ
Alexei Ivanych Prokhladitelnyj 氏(冷やす)、或ひは ドゥシエスパーテリヌイ
Dushespastelnyj 氏(魂を救ふ)。お嬢さん曰く、「あの人の所へ嫁つてもいさげど、プロフラヂーテリナヤ
Prokhladitel'naja 夫人なんて厭な名ね。」

動物園長の夢。先づ最初にモルモットが動物園に寄附される。次に駝鳥、次に兀鷹、次

に羊、それからまたもや駝鳥。寄附が際限なく續くので、動物園は満員になる。——餘りの怖ろしさに園長は目をさます、汗びつしよりになつて。……

馬を車に附けるのは鈍いのろが、馬車を走らせるとなると速い、そんなところがこの國民の性質の中にある——と、曾てビスマルクが言つた。

役者といふものは金があると、手紙を出さずに電報を打つ。

昆蟲界では芋蟲から蝶々が出る。人間界では反對に、蝶々さんから芋蟲が出る。

飼犬は食物を呉れて可愛がつて呉れる主人たちにはなつかないで、打つてばかりゐる赤の他人の料理女になつた。

ソフィーは、吹抜け風で愛犬が風邪を引きはしまいかと心配だつた。

この邊の地味はすばらしく上等です。ためしに梶棒かぢぼうを植ゑて御覽なさい、一年たつたら馬車が生えますよ。

非常に考への進んだ、自由思想の持主であるXとZとが結婚した。ある晩、仲よく話をしてゐるうちに、口論をはじめて、やがて掴み合ひになつた。翌る朝、お互ひに恥しく、

狐につままれたやうな氣持がする。あれは何か例外的な神経作用だつたのだらうと考へる。次の晩もまた口論と掴み合ひ。それが毎晩つづいた擧句に、自分達も別に教養がある譯ではなく、世間並みの野蠻人なのだといふことにやつと氣がついた。

戯曲。客を避けるために、下戸のZが大酒家のふりをする。

子供が出来る、私たちは妥協癖や町人根性などといふ持ち前の弱點を、そつくり「これも子供のため」とかこつける。

——伯爵様、わたくしはモルデゲンヂヤモルデゲンヂヤへ参ります。

*「しやつ面の國」ほどの意。

ワアルツアラ
Varvara Nedotophina 嬢。

*「できそこなひ」ほどの意。

技師または醫師Zが、編輯長をしてゐる伯父を訪問する。面白くなつて、度々訪ねて行くうちに寄稿をする様になり、だんだん自分の仕事を投げやりにする。ある夜更け編輯局を出てから、ふと思ひ出して、頭を抱へる——萬事休す！ 白髪がふえる。それから云ふものこれが習慣になつて、すっかり白髪頭になり、皺だらけになる。そして尊敬すべき、しかし名も無い出版屋になつた。

三等官の老人が、子供たちに見ならつて、自分も自由主義者になる。

新聞「輪形パン」。

サーカスの道化役——これは才物である。彼と話をしてゐる案内人は、フロックを着てはゐるが凡俗である。嘲りの薄笑ひを浮べた案内人。

ノヴォズィブコフ*から出て來た伯母さん。

*歐露の町の名。「新しい搖籃」ほどの意。

あの男は脳淡化症にかかったので、脳味噌が耳へ漏つて來たんですよ。

なに、文士だと？ よし五十錢で文士にしてやる。それでもなりたいか？

正誤表。——^{ペレツオツチク}Perodchik (譯者) は ^{ポドリヤツチク}Podriachik (請負師) の誤植。

四十になるみつともない無能な女優が、晩飯に鷓鴣を食べた。私は鷓鴣が可哀さうでならなかつた。この女優よりもこの鷓鴣の方が、生涯どれだけ才能あり伶俐であり潔白であ

つたか知れないと、今さらに思ひ偲んだ。

醫者は私にかう語るのを常とした、「もし君のからださへ保つなら、思ふ存分に飲みたまへ。」(ゴルブーフ)*

*十九世紀後半の俳優兼民話作者。

^{カルクレメルタルタルラウ}Karl Kremertartlau 君。

野原の遠景、白樺が一本。その畫の下の題銘に曰く、孤獨。

客たちは歸つた。彼等はカルタをしてゐた。歸つた後の亂雑さ——一ぱいにこもつた烟草のけむり、ちらばつた紙きれ、皿小鉢。しかし肝腎なのは、黎明と回想。

馬鹿者に褒められるより、その手に掛つて討死した方がましだ。

持主が死んだら、どうして樹がかうも見事に繁るもんですか？。

登場人物が圖書室を備へてゐる。だがいつも他家へお客に行つてゐる。さつぱり閱覽者が不在のである。

人生はいかにも宏大無邊なものに見えるが、人間はやつぱり五錢銅貨の上にちよこなんと坐つてるのさ。

ゾロトノーション*だつて？ そんな町はない！ あるもんか！

*歐露の町の名。「金を含有する」の意。

彼は笑ふとき、齒と上下の齒莖を見せる。

彼は心を擾さぬ文學が好きだつた。即ちシラー、ホメロス等々。

女教師Nが、夕方家に歸る途中で、知合ひの女から思ひがけない話をきく。それは、Xが彼女を戀してゐて、結婚を申込まうと思つてゐる、といふのである。不器量で、結婚のことなどついぞ考へたこともなかつたNは、歸宅してから、怖ろしさのあまり長いこと顫へてゐる。それから、その晩は一睡もせずに、泣き明かす。やがて明けがた近くになると、Xを慕ふやうになる。ところがその日のお午ごろ、あの話はただの當て推量で、Xの求婚の相手は彼女ではなく、Yであることを知る。

四十五歳の女と關係して、やがて怪談を書きだした。

私は印度へ行つた夢を見ました。するとその地方の領主とか王侯とかいふ人から、象を贈られました。しかも二匹も贈られたんです。その象にすっかり惱まされて、たうとう眼がさめました。

八十爺さんが六十爺さんを相手に話してゐる、「よくも恥しくないね、お若いの！」

教會で「今日ぞ吾等が救ひのはじめ」を合唱してゐる時、彼は家で魚の頭のスープを煮てゐた。ヨハネ斬首の日には、首に因む丸いものは一さい口に入れなかつたが、家の子供たちを打ちのめした。

*「斬る」と「打つ」は同じ語根を有する。

記者が紙上に嘘を書いたが、本當を書いた様な氣がしてゐた。

孤獨が怖ければ、結婚をするな。

御本人は金持だが、お母さんは養老院にゐる。

お嫁さんを貰つて、家具を入れて、書き卓づくろを買つて、文房具を揃へた。ところが何一つ書くことがなかつた。

ファウスト曰く、「なんでも用に立つ事は知ることが出來ず、知つてゐる事は用に立たぬ。」

*この句は鷗外の譯による。

嘘をついても人々は信じる。ただ權威を以て語れ。

やがて墓の中にひとり横はるやうに、實際の俺は一人ぼつちで生きてゐる。

ドイツ人が言ふ、「主よ、われら蕎麥菓子グレインネツイクを憐れみたまへ。」

*グレインニキ Greshnik(罪人)を言ひ違へた。

「ああ、私の大事な吹出物さん」と許嫁がうつとりした聲で言った。相手はちよつと考へてゐたが、やがて腹を立てて——破談になつた。

瓶はフニアヂ・ヤノス^{*}の瓶だが、中には櫻ん坊か何かの酔漬けがはいつてゐる。

^{*} 鑛泉水の名。

拙劣きはまる藝で、あらゆる役を片つ端から殺しつづけた女優——生涯、死ぬまでさうだつた。人氣はないし、その演技は見物に怖毛をふるはせ、いい役を臺無しにするのだつたが、それでも七十の歳まで女優をしてゐた。

自分が悪いと感じる人間だけが悪人であり、従つて後悔もできる。

補祭長は「疑ひ惑ふ人々」を呪ふ。ところが當のその連中はといふと、唱歌隊席に立つて、自らへの呪詛を歌つてゐるのだ。

——スキターレツ

彼はこんなことを夢想した——妻が足腰たたずに寝込んでゐる。彼は後生のために、妻の看病をする。……

マダム グヌーシク*
Gnusia.

油蟲がゐなくなつた。この家に火事が出るぞ！

*鼻聲。

『天^{ルツエドミートリ}一坊と役者たち』、『ツルゲーネフと猛虎群』——かうした論文を書くことは可能だし、また書かれることだらう。

題。——『レモンの皮』

チ拉拉、チ拉拉、兵隊チ拉拉。

俺はお前の、本腹^{ほんはら}の夫^{むつと}だぞ！

海水浴をしてゐたら、波が、大洋の波がぶつかつたので流産。——ヴェスヴィウスが噴火したので流産。

海と私、ほかには誰ひとりゐない。——そんな気がする。

トレフイハノフ*
Trefykanov 君。

*「息をはずませる」

教育。——彼のところでは、三歳^{みつ}になる赤ん坊が黒いフロックを着て、長靴をはいて、チヨッキを着てゐる。

誇らしげに、「僕の出身はユーリエフ大學ぢやありません、ドルパート大學ですよ！」^K

*ドルパート(エストニヤ)はロシヤ名をユーリエフと言ふ。

その鬚は魚の尻尾に似てゐた。

ユダヤ人 ツイナチク*
Tsybnik.

*「雑つこ」の意

笑ふとき、まるで冷たい水の中にすつぽり漬かるやうな聲を出すお嬢さん。

ママ、稻光りは何で出来てるの？

127

領地は厭な臭ひがしてゐる、厭な感じがしてゐる。木々は兎にかく植ゑてはあるが、變てこな工合である。遙か彼方の隅の方では、番人の女房が一日ちゆうお客様用の敷布^{シツツ}などを洗濯してゐる。——その姿は誰にも見えない。世間はかうした旦那がたに、来る日も来る日も自分たちの権利や、自分たちの高貴さについて喋らせて置くのだ。……

126

彼女は犬を極上のキャヴィヤで養つてゐた。

われわれの自尊心や自負心はヨーロッパ的だ。しかし發達程度や行動はアジヤ的だ。

黒犬——まるでオーヴァシューズを穿いてゐるやうな。

ロシア人の抱いてゐる唯一つの希望は、二十萬ルーブルの籤を抽き當てることだ。

厭らしい女だが、子供はなかなか立派に躰けた。

人間といふものは誰でも、何かしら祕かくしてゐるものだ。

Nの小説の題——『ハーモニイの力』。

ああ、ひとりもの獨身男ややもめ鰥夫男を知事に任命したらどんなにいいだらう！

あるモスクヴァの女優が、生れてこのかた七面鳥を見たことがなかつた。

老人の言ふことを聞いてゐると、愚言にあらずんば悪口である。

「ママ、ペーチャはお祈りを上げなかつよ。」そこで寐てゐるペーチャを起こす。彼は泣き泣きお祈りを上げる。それから横になると、いつけ口をした奴を拳で威かす。

その人物が男か女かといふことは、醫者でなければとても分るまいと彼は思った。

一人は正教の坊主になつた。もう一人は聖靈否定派の坊主になつた。三人目は哲學者になつた。本能的にさうなつたのである。腰も伸ばさずに朝から晩まできちんと働くのが、

みんなてんでに厭だつたので。

「一つ胎の^は」といふ言葉が妙に好きな男。——一つ胎の私の兄さん、一つ胎の私の妻、一つ胎の婿、等々。

ドクトルNは私生兒で、父親の膝下に暮したことがなく、父親のことを碌に知らなかつた。幼な友達のZが案じ顔でかう告げる、「ねえ君、親父さんが淋しがつてをられるぜ。病氣なんだ。一目でいいから君に會へまいかと言はれるのだが。」父親は『スキス亭』といふ食堂を營んでゐる。魚のフライをまづ手づかみにして、それからフォークで扱ふ。ヴォトカはぶうんと下等な臭ひがする。Nは出掛けて行つて、店の様子を眺め、夕食を食べてみた。白髪まじりのこの肥つた百姓親爺め、よくもこんなやくざな飯を商賣にしやがつ

てと腹が立つただけで、ほかにはこれといふ感想もなかつた。ところが或るとき、夜の十二時にその家の前を通りかかつて、ふつと窓を見ると、父親が脊中を丸めて帳簿をつけてゐる。その姿が自分にそっくりだつた、自分の身振りに生寫しだつた。……

鼠色の去勢馬みたいに無能な男。

つい悪ふざけが過ぎて、そのお嬢さんに蓖麻子油を飲ませた。それでお嬢さんはお嫁に行かなかつた。

Nは一生、有名な歌手や役者や文士に罵倒の手紙を書いて出した。——「恥知らずめ、

よくものめのめと……」云々。署名はしないで。

彼（葬儀屋の松明擔ぎ）が三角帽をかぶつて、金モールのついたフロックに、側條入りのズボンを穿いて現はれたとき、彼女は彼を戀してしまつた。

輝くばかりに明るい樂天的な性格。まるで、めそめそした連中をやつつけるために生きてゐるやうな男。でつぶりして、健康で、大食である。みんな彼を愛してゐるが、實はそれもめそめそした連中が怖いからに過ぎない。底を割つていへば彼はつまりらぬ男である、人間の屑である。ただもう食つて大聲で笑ふだけの男である。やがて彼が死ぬ段になつて一同は、彼が何一つしなかつたことにやつと氣がつく。彼といふ人間を見違へてゐたことに氣がつく。

建物の検分が済むと、賄賂を取った委員連中は晝食に舌鼓を打った。それはまるで、喪はれた彼等の名譽を追善する會食のやうなものだつた。

嘘をつく人は穢らしい。

夜中の三時に彼は起される。停車場へ勤めに出るのだ。毎日毎日かうやつて、もう十四年になる。

奥さんが愚痴をこぼす。「あの子に土曜日ごとに下着を更へなさいと書いてやります。す

ると返事に、なぜ土曜にするんですか、月曜ぢやいけませんかと言つて來ます。まあいいわ、では月曜にねと言つてやります。するとまた、なぜ月曜がいいのですか、火曜ぢやいけませんかと言つて來ます。正直ない子ですけど、世話の焼けるつたらありやしない。」

賢者は學ぶことを好み、愚者は教ふことを好む。(諺)

平僧も掌院も僧正も、その説教の相酷似せること驚くばかりだ。

人はよく、萬民同胞だとか、民利だとか、勤勞だとかいふ問題について若いころ論争したことを思ひ出すものだが、本當は論争なんかやつたことはいぞなく、ただ大學時代に

醉態を演じたのに過ぎない。また、「學士章を着けてゐる連中は社會の面汚しだ、曾て人間の権利のために、信教や良心の自由のために闘争した面目いまいづこにありや」などと書く。だが彼等は、一度だつて闘争なんかしたことはないのだ。

領地管理人。ブキションといった型の男で、一度も主人に會つたことがない。だから、幻想に生きてゐる。主人は定めし非常に賢い、人物のよくできた、高尚な人だらうと想像して、自分の子供達もそんな風に教育した。ところが、やがて主人がやつて來たのを見ると、くだらない、了簡の狭い男だつた。そこで眼も當てられぬ幻滅。

毎日、晝飯が濟むと良人は、坊主になつてしまふぞと言つて妻を威かす。妻は泣く。

モルドフツオストフ*
Mordokhustou 君。

*鼻面と尻尾。

夫婦が十八年も一緒に暮らして喧嘩ばかりしてゐる。たうとう夫は、ほかに女が出來たと根も葉もない打明け話を妻に聞かせて、夫婦わかれになる。夫は非常に満足だ。町ぢゆうの人は憤慨してゐる。

何の役にも立たぬもの、忘れられた面白くもない寫眞の貼つてあるアルバムが、隅つこの椅子の上に載つてゐる。もう二十年もさうして轉がつてゐるが、誰ひとり思ひきつて棄てる氣になれない。

四十年前のこと、Xといふ稀に見る非常に立派な人間が五人の人の命を救つた次第を、Nが話して聞かせる。一同がその話を至極冷淡に聽いてゐるのが、このXの功績がもう忘れられて一向に人々の興味を惹かないのが、Nには不思議でならない。

一同は極上のキャヴィヤにがつがつとかぶりついて、瞬く間に平らげてしまった。

莊重な演説の最中に小さな息子に向つて、「ズボンズボンのボタンをおかけ。」

あなたがその人間に、彼がどんな體たらくなのかを見せてやるとき、はじめて彼は向上するのです。

鳩羽色の御面相。

ある地主が、鳩やカナリヤや鶏の羽色を變へて見ようと、胡椒の實や、マンガン酸加里や、そのほか色んな愚にもつかぬ餌を與へる。——これが彼の唯一の仕事で、客の顔さへ見ればその自慢ばなしをする。

有名な聲樂家を傭つて、結婚式の席上で使徒行傳を誦ませる。彼は誦み上げて、見事な出來榮えだつたが、お金(二千)は拂つて貰へなかつた。

笑劇。——わたしの知人の クリツオモルドイ Krivomordij (顔まがり) 君は、名前こそ變てこですが、ちゃんとした男です。 クリツオノキー Krivonogij (足まがり) でも クリツオルキー Krivorkij (手まがり) でもなくつて、實に「顔まがり」つていふんですが、ちゃんと結婚して、奥さんに可愛がられてゐましたつけ。

Nは毎日牛乳を飲んでゐた。そのたびにコップへ蠅を入れて、從僕を呼んで詰問するのだつた。「これは何ちうことか？」まるで人身御供みたいな顔をして。これをしないでは一日も生きて居られなかつた。

陰氣な女だ、蒸風呂の臭ひがする。

Nが妻の不貞を嗅ぎつけた。彼は憤慨する、煩悶する。けれど逡巡決せず、胸におさめて黙つてゐる。彼は何も言はずに、とど相手のNからお金を借り入れる。そして相變らず自分は潔白だと思つてゐる。

○ 弓形パンで飲むお茶を切上げるときには、私は「食ひたくない！」と言ふ。ところが讀みかけた詩や小説を途中で投出すときには、「これぢやない、これぢやない！」と言ふ。

公證人が高利で金を貸す。遺産は残らずモスクヴァ大學へ寄附いたしますんで、とそんな辯解をしながら。

その寺男はなんと自由主義者だつた。曰く、「今ぢや私達の仲間が、まさかと思ふやうな割目から、ぞろぞろ這ひ出して來まさあ。」

地主のNは、モロカン教を奉ずる隣村の地主一家としよつちゆう喧嘩をして、訴訟沙汰をもちあげたり、悪罵を放つたり、呪つたりしてゐる。ところが、やがて彼等がよそへ移住して行つてしまふと、彼は空虚を感じて、みるみる老い衰へて行く。

モルドウハーノフ
Mordukhanov 君。

N夫婦の家に妻君の弟が引取られてゐる。若いくせにめそめそした男で、人の物を盗ん

だり、嘘をついたり、狂言自殺を圖つたりする。N夫婦は途方に暮れる。へたに家を追出して自殺をされちや堪らないし、またいくら追出したくつても、どんな風にやつたらいいのかわらない。彼が手形偽造の罪で收監される。N夫婦は自分達が悪かつたのだと思つて、涙に暮れる、懊惱する。悲歎のあまり妻が死ぬと、夫も間もなくその後を追つた。そこで財産はすつかり弟の物になつたが、彼は放蕩に使ひ果たして、またもや懲役に行つた。

假にだよ、僕が嫁に行くとしたら、まあ二日もすれば逃げ出しちまふだらうよ。ところが女といふやつは、すぐさま夫の家に居つちまふんだ。まるでその家で生まれたやうな工合にね。

いよいよ君も九等官 (Titularnyj Sovetnik) になつたね。だが一たい誰に忠告しようと言

チトウリヤルヌイ ソヴェトニク*

ふんだね？ 誰ひとり君の忠告なんか聴く奴がないやうに願ひたいもんだ。

* *Sozhenik* は顧問乃至忠告者の意。

トルジョーク*。町會が開かれる。議題は、町の資産増加の件。……決議に曰く、ローマ法王にトルジョークへ移轉方を招請すること。すなはち法王の居市と奠^{また}めること。

* モスクヴァ西北の小工業都市。

へぼ詩人の歌にこんな句があつた。——彼は蝗のごとく逢引に飛びゆけり。

だがさうした細かしいいきさつは、殆んどわれわれの耳には舞ひ込まなかつた。(Lolo)

Sの論理。——私は他宗寛容には賛成ですが、他宗許容には反対です。厳格な意味で正教的でないものは、許容するわけには行きません。

聖ピオニヤ及びエピマーハ、三月十一日。聖プープリヤ、三月十三日。

詩や小説戯曲の類ひは、現に入用なものを含むわけではなくて、希求されるものを含むのである。しかもそれは大衆を遙かに抜くものではなくて、たかだか大衆の最良分子が希求するものを表現するにとどまる。

頗る用心ぶかい小紳士。賀状までも書留にして、配達證明つきで出す。

ロシアは曠大なる平原にして、猛漢ひとり飄々乎として疾走す。

プラトニードグ イヴァノフサナ
Platonida Ivanovna.

もしも君の政治思想さへ堅實ならば、以て理想的市民たるに充分である。同様のことが自由主義者についても言ひ得る。即ちもしその思想が堅實味を缺くならば、他の點はすべて顧慮される餘地はないのだ。

人間の眼は、失敗のときにはじめて開くものだ。

ジューツコフ*
Zinzhkov 君。

*飲んだくれの意。

五等官、尊敬すべき人物。ところが不意に、その彼がひそかに女郎屋を經營してゐることが暴露する。

Nが非常にすぐれた戯曲を書いた。ところが誰ひとり褒めて呉れない、喜んで呉れない。

そして口々に言ふ、「今度の御作を拜見ませう。」

稍々身分の高い人々は正面玄関から通つた。稍々身分の低い人々は裏口からはいつた。

彼 私の町に、キシミーシ(乾葡萄)といふ苗字の紳士がゐましたがね。自分ぢやキーシ
ミシと言つてゐましたけど、なあに本當はキシミーシだと言ふことは皆んなちやんと知つ
てゐましたよ。

彼女(ちよつと考へて) 何て厭らしいんでせう……。せめてイジューム(乾葡萄)とでも言
ふんならまだしも、キシミーシだなんて。

姓。——^{ブラゴボスビータンヌイ}
Blagovospitannyj.*

* 驥のよい。

最も尊敬する *Ja. Ja.* よ。*

* 手紙の前書きに、餘計な「最も」をつけた代りに相
手の名イヴァン・イヴァーノヴィチを略稱した。

幸運に恵まれた、何でもとんとん拍子に成功する人間は、時として何と鼻持のならぬこ
とだ！

NがZと關係してゐるといふ噂が人の口にのぼりだすと、どうしてもNとZの仲を結び

つけずには措かないやうな空気が、次第次第に醸成されて行くものだ。

まだ蝗がゐた時分、私は蝗撲滅論を書いて一世を狂喜させ、名聲と富とを擅まにしたものです。ところが蝗がもう久しく跡を絶つて、世間に忘れられてしまつた今日、私は民衆の間に埋もれて、忘れられた無用の人間になつてしまひました。

快活に浮き浮きした調子で、「では御紹介しませう、こちらはイヴァン・イヴァーヌイチ・イズゴエフ君、家内の戀人です。」

その莊園には到るところに立札が立つてゐる。——「無用の者入るべからず」「花を踏む

べからず」等々。

領地には立派な圖書館があつて、主人の自慢の種になつてゐるが、全く利用されてはゐない。出して呉れるコーヒーは水つぼくつて、とても飲めたものぢやない。庭は不趣味な造りで、一輪の花もない。——總べてかうしたことを、何かトルストイ的だと心得てゐる。

イプセンを研究しようとスエーデン語を習つた。そのために非常な時間と労力を費した。ところが急に、イプセンは大した作家でないことが分つた。さて折角のスエーデン語をどうしたものかと途方に暮れた*。

*このスエーデン語といふのはどういふ意味だか分らない。勿論イプセンの書いたのはノールウェイ語である。

Nは南京蟲の驅除を商賣にして、それで生計を立ててゐる。文藝作品に對するときも、自分の職業的觀點からする。……もし『コサック』に南京蟲のことが書いてなければ、つまり『コサック』は駄作である。

人間が信ずるもの、即ち存在す。

聰明な少女。——「私、心にもない眞似なんか出来ないわ……」「私、嘘なんか一ぺんもつかないわ……」「私ちゃんと主義があるのよ……」「二六時ちゆう私、私、私……」。

Nが女優（あるひは歌姫）をしてゐる妻に腹を立てて、彼女の藝を貶した劇評をこつそりと新聞に出す。

或る貴族の自慢。——「私のこの邸はドミートリ・ドンスコイ時代の造營^{*}でしてな。」

^{*}十四世紀。

——あの治安判事さんつたら、あたしの犬をひどい呼び方をしましたのよ、「こら、畜生つ！」だなんて。

雪が降つた。けれど、地面が血に染んでゐるので積らなかつた。

彼は遺産を残らず慈善事業に寄附したので、親類や子供たちの手には何一つ渡らなかつた。彼等が大嫌ひだつたのである。

大さう惚れっぽい男。お嬢さんと知合ひになるが早いか、もう山羊になつてしまふ。

貴族 ドレゴリエフ*
Drekoliev.

*棒杓。

俺の記念碑の除幕式に侍従連中が参列するのと思ふと、ぞつとするなあ。

合理主義者ではあつたが、罪深い男だつたので、教會の鐘の鳴るのが好きだつた。

父親は有名な將軍、邸には數々の名畫、高價な家具調度。父親が死んだ。娘たちは教育はあるのだが、自墮落な身装みなりをして、碌に本も讀まず、馬を乗廻して、退屈がつてゐる。

正直な人たちだから、必要のないかぎり嘘はつかぬ。

金持の商人が、うちの便所にシャワーを附けたいと思ふ。

朝はやくからオクローシカ^{*}を食べた。

^{*}クヴァスで作る肉入りスープ。

「この護符^{おまもり}を失くすと死にますよ」とお祖母さんが言ひました。ところが急に見えなくなつたので、長いこと苦に病みました、死ぬかと思つてびくびくしました。ところがあなた、どうでせう、奇蹟があらはれたんです——その護符が見つかつて、私は生き存へるこ
とになつたんです。

誰もかもが、私の芝居を観て即座に何か教はらう、何かしら利益を汲みとらうと思つて、劇場へ押しかけます。しかしお断りして置きますがね、私にはそんなやくざ者のお相手をしてゐる暇はないのです。

すべて新しいもの、利益^{たけ}になるものを、民衆は憎悪し輕蔑する。コレラが流行したとき、民衆は醫者を目の敵にして打ち殺した。その一方、民衆はヴォトカを愛飲する。民衆の愛憎^{めやす}を標準にして、その愛し或ひは憎むものの價値を判断することが出来る。

窓ごしに、昇がれてゆく亡者を見ながら、「お前は死んで、お墓へ運ばれて行く。ところで俺は、朝飯をやりに行くとするか。」

チエック人 フシリーチカ
Vshicka.

四十歳の男が二十二の女を娶つた。彼女は最近の作家のものしか讀まず、緑色のリボンをかけて、黄色い枕に埋まつて寝る。自分の趣味に自信たつぷりで、自分の意見をまるで法律のやうに述べたてる。美人で、馬鹿ぢやなく、おとなしい女だが、彼は離婚する。

喉がかわく時には大海をも一飲みにする氣でゐる——これが信仰。いざ飲むとなるとせいぜいコップに二杯だ——これが科學。

笑劇につかふ人名。——フイリヂコソフ ポブルイグーニエフ
Fildkosou, Popygimiev.*

*「瓦斯絲」、「お跳ね」(男性)の意。

以前には、主義主張あり、世の尊敬をかち得ることを好む立派な人物は、將軍や僧侶になつたものだ。ところが今日では、作家や教授になる。……

歴史によつて神聖化されないものなんか、一つだつてありはしない。

ゼヴーリヤ*
Zevulia 夫人。

いい子供でも泣く顔は見つともない。同様に、下手な詩の中に、作者の人間としてのよさを発見することがある。

もし女にちやほやされたいなら、すべからく奇人であれ。夏でも冬でもフェルトの長靴を穿いてゐる男を私は知つてゐるが、その男は女に騒がれた。

ヤルタに着いて見たら、どこもこれも満員だった。イタリヤ・ホテルへ行つて見たが、ひと部屋も明いてゐない。「僕の三十五號室は？」「ふさがつてをります。」何とかいふ奥

さんである。「御婦人と御同室ではいけますまいか。あちら様は一かう構はないと仰しやいます。」とホテルの人が言ふ。そこでその部屋に落ちつく。會話。夕暮。韃靼人のガイドがはいつて来る。私は耳も頭もがんがんにして来る。私は椅子にかけたなりで、何にも見えず何にも聞こえない。……

令嬢がぐちをこぼす。——「兄さんつたら可哀相にサラリイがとても少ないのよ。—— たつた七千なんですつて！」

彼女がいふ、「今ちやもう、一つことしか眼につかないわ。あんたの口の大きいこと！ 大きな口！ 何てまあ大きな口！」

馬は有害無益な動物です。馬のために餘計な地面まで耕します。馬は人間に筋肉労働の習慣を失くさせます。そののみか屢々贅澤品にもなります。馬は人間を懦弱にします。將來は馬なんぞ一匹もゐなくなるがいいです！

N君は聲樂家である。誰に會つても口を利かない、喉はすつかりくるんである——聲を大事にするのである。ところが誰一人ついで彼が歌ふのを聞いた人はない。

何事についても斷乎として、「それが一體何になります！ 何にもなりませんよ！」

夏でも冬でもフェルトの長靴を穿いてゐる。それをかう説明する。——「頭が軽くなる

んです。熱のため血が足の方へ下りますからね——考へがはつきりしますよ。」

婦人が冗談にフォードル・イヴァーノヴィチと呼ばれる。

笑劇。——Nが結婚の用意に、廣告に出てゐた軟膏を頭の禿に擦りこんだ。すると意外千萬、頭に豚の剛毛が生えて來た。

——御主人は何をしてをられますか？

——蓖麻子油ヒマシヨをいただいでますわ。

お嬢さんの手紙。——「すると私たちの家、堪らないほどあなたのお宅と近くなるわ。」

Nはずつと前からZに戀してゐる。ZはXに嫁ぐ。結婚後二年ほどしてZはNを訪れる。彼女は泣いて、何か話がある様子だ。てつきり夫の不平を言ひ出すのだとNは思つて待ち構へる。ところがZは、Kを戀してゐることを打ち明けに來たのだつた。

Nはモスクヴァの有名な辯護士。ZはNと同郷のタガング生れ。彼はモスクヴァに出て來ると、この名士に會ひに行く。彼は大喜びで迎へられる。しかし彼は、その昔Nと一緒に通つた中學を思ひ出し、Nの制服姿を思ひ出し、羨望のために心が平らかでない。そして、なあんだ住居だつて大して上等ぢやないし、Nといふ人間にしてもお喋りで感服で

きんな、などと考へる。やがて彼は、自分の抱いた羨望の念と自分の品性の下劣さのためすつかり白けた氣持になつて、Nの家を辭去する。自分がこれほど下劣な人間だらうとは、彼はその時まで夢にも思はなかつた。

戯曲の題——『蝙蝠』。

老人に出來ないことは悉く、禁止されるか又は危険視されるのだ。

彼はひどく老い込んでから、若い女と結婚した。すると彼女はみるみる衰へて、彼とともに弱つて行つた。

一生涯、資本主義だの何百萬だのと書いてゐた。そのくせ金のあつた例しはなかつた。

奥さんが美男のお巡りさんに戀した。

Nは非常に腕のいい、得がたいほどの仕立屋だつた。ところが色んな詰らぬことのために害そこなはれて、すっかり駄目になつてしまつた。ポケットの無い外套を作つたり、とても高い襟を附けたりした。

笑劇。——荷物運送兼火災保險會社の代理人。

上演できる脚本なら誰にだつて書ける。

田舎の領地。冬。病氣のNが家に引籠つてゐる。ある晩、何の前觸れもなしに停車場から、Zといふ見知らぬ若い少女が權を乗りつける。彼女は自己紹介をして、Nの看病にやつて來たのだと述べる。Nは當惑する。薄氣味が悪くなつて斷る。するとZは、とにかく今晚は泊めて貰ひますといふ。一日たち二日たつが、彼女は出て行かない。彼女はとても我慢のならぬ性格の持主で、折角の閑居をめちやめちやにしてしまふ。

レストランの特別室。金持のZがナプキンを頸玉に結んで、鱒魚てんぷらをフォークでつつきながら呟く、「この世の名残に一口やるか。」——それがずっと以前から毎日のことである。

ストリンドベリイや一般に文學に關するL・Lトルストイの考へ方は、ルフマーノヴァ^{**}女史にそつくりだ。

*リョフ・トルストイの息子。

**三流所の女流作家。

デドロフ^{*}は談たまたま副知事や知事のことと及ぶと、『ロシヤ文學百人集』に收められた『副知事の來着』を持ち出しなどして、浪漫主義者になつてしまふ。

*三流所の小説家。

戯曲『生活の豆』。

馬醫者A、種馬階級の出身。

——うちのお父さんはスタニスラフ二等勳章^{*}までみんな持つてましたわ。

*その下にはスタニスラフ三等勳章しかない。

Консултация
Consultation.*

*Консултация
Consultation (立會診斷)の言ひ誤り。「領事」^{Консул}に似て來る。

陽は輝いてゐるけれど、私の胸のなかは暗い。

S町でZといふ辯護士と知合ひになつた。美しきニカといつた型の男である。……子供が澤山ゐるが、どの子に對しても教へ導くやうな態度で接して、柔和で優しく、決して荒い言葉を使はない。間もなく私は、彼にはもう一つ別の家庭のあることを知つた。やがて彼は娘の結婚式に私を招んで呉れた。彼はお祈りをして、ひれ伏さんばかりに頭を垂れてかう言ふ、「私にはまだ宗教心が残つてゐるのです。私は信者なんです。」彼のゐる席で教育問題や婦人問題が話題になると、彼は何の話か分りませんといつた風な無邪氣な顔をする。法廷で辯論をする時には哀願するやうな顔になる。

——お母さん、お客様の所へ出ないで頂戴な。あんまり肥つてらつしやるんですもの。

戀愛ですと？ 戀をしたですと？ とんと覚えがありませんわい！ 私は八等官ですて。

まだ母親の胎から出て來ない嬰兒のやうに物を知らぬ男。

Nのスパイ熱は、子供の時からよぼよぼ爺さんになるまで變らなかつた。

——賢い言葉を使ふことだな、萬事はそれに盡きるですよ。——哲學……赤道……といつた工合にね(戯曲に使ふこと)。

星たちはもうとつくの昔に消えてしまつた。しかし俗衆には相變らず光つて見える。

學者になるかならない内から、もう名聲を望むやうになつた。

後見役ブロンクイをしてゐた男が、厭氣がさしてやめた。それから十五年ほど劇場へ足踏みもしなかつた。やがて芝居見物に行つて、感動のあまり涙を流し、佗しい氣持になつた。家に歸つて、芝居は如何でしたかと妻君に訊かれると、彼はかう答へた、「蟲が好かんね！」

小間使のナーヂャが、油蟲・南京蟲の驅除夫に戀した。

或る五等官が死んだ後で、彼が一ルーブルの日當で劇場の犬の聲色方に傭はれてゐたことが分つた。貧乏だつたのだ。

君はちやんとした、身装みなりの立派な子供たちを持たなくちやならぬ。君の子供達もやはり立派な住居すまひと子供たちを持たなくちやならぬ。そのまた子供たちも、やはり子供たちと立派な住居を持たなくちやならぬ。一たい何のためにだつて？——誰が知るもんか。

彼は毎日わざと嘔気をつける。——健康のためにいいといふ親友の忠告にしたがつて。

さる官吏が風變りな生活をはじめた。別荘にひどく高い煙突をつけ、緑色のズボンをはき、青いチョッキを着込み、犬の毛を染め、眞夜中に正餐をとる。一週間すると降参してしまつた。

成功は早くもこの男をべろりと一舐めした。

「Nは金に困つてるよ。」「何だつて？ 聞えなかつたよ。」「Nが金に困つてるつて言つたんだよ。」「一體そりや何のことかね？ 僕にや分らないなあ。第一NつてどのNだい？」「Zを妻君にしてゐるあのNさ。」「成程、それがどうしたね？」「あの男を援助してやらなくちやなるまいつて言ふんだよ。」「え？ あの男つて誰のことかね？ なぜ援助してやるんだね？ そりやまたどういふ意味かね？」等々。

旅館の主人が差出した勘定書の中に、「南京蟲十五錢」といふ項目。その説明。

屋根を打つ雨の音を聴きながら、おまけに自分の家には厄介な退屈な人間はゐないのだと意識しながら、家に引籠つて居るのは何といふ愉しさだらう。

Nはいつも、ヴォトカを五杯もひっかけた後ですら、必らずヴァレリアン・ドロップス
(興奮劑)を嚙む。

彼は女中と事実上の夫婦になつてゐる。彼女はおそろおそろ、彼を「殿様」とあがめる。

私はある田莊を借りて避暑した。持主は大さう肥つた老婦人だつた。彼女は離れに住んで、私は母家に住んでゐた。彼女は夫に死別し、子供達にも皆死なれて、一人ぼつちで、ひどく肥満してゐた。領地は借金の始末に賣りに出てゐて、備へつけの家具調度の類は古めかしい、趣きの深いものだつた。彼女はしよつちゆう、自分に宛てられた亡夫や息子の古手紙を讀んでゐた。それでゐて彼女は樂天家だつた。私の家の者が病氣になると、彼女

は微笑みながら「ねえ貴方、神様のお助けがありますわよ」と慰めるのだつた。

NとZとは女學校の仲好しで、二人とも十七八の年頃である。不意にNは、Zが彼女の父親N氏のために身重になつたことを知る。

牧師^{ぼくち}チャマが參られた。……^{チエイ}チン聖な。……神よ、^{フク}チユク福あれ。……

女權擴張についてのお談義のなんと空疎な響きを立てることよ！ もしも犬が名文を書いたら、彼等は犬をさへ認め兼ねない。

咯血。——なあに^{おでき}膿腫が破れたのさ。……何でもないさ、まあもう一杯やんなさい。

インテリゲンツィヤは無用の長物だ。何故といふに、お茶をがぶがぶ飲んで、やたらに喋り立てて、部屋ぢゆう濛々たる煙草の煙、林立する空瓶……。

まだ娘の頃にユダヤ人の醫者と駈落をして、女の兒を生んだ。今では自分の過去が厭はしい、赤毛の娘が厭はしい。しかし父親は相變らず彼女も娘も愛してゐて、丸々と肥つたきれいな顔をして窓の下を歩いてゐる。

楊枝を使つて、またそれを楊枝入れに差した。

夫婦ともよく眠れないので、つい話に身がはいつてしまつた。文藝が衰へたといふ話から、雑誌を出したらさぞよからうといふ話になる。二人ともこの思ひつきに夢中になつた。やがて横になつて、暫く言葉がとどえた。「ポポリキンに書いて貰ふかね？」と彼が訊いた。「無論ですわ、書いて貰ひなさいよ。」朝の五時に彼は車庫へ勤めに出る。彼女は雪の中を門まで送つて行つて、彼の出たあとを閉める。「ええと、ポターペンコにも書いて貰ふかね？」と、木戸の外から彼が訊く。

アレクセイは父親が貴族に列せられたと知ると、さつそく署名をアレクシイに改めた。

教師曰く、「人畜の犠牲を伴へる列車の顛覆」といふのはいけません。「その結果として人畜の犠牲を生じたる列車の顛覆」としなくてはいけません。」……「參集したる客に基つき」……

戯曲の題『金色の雨』。

われわれ無常の人間の物差しは一つとして、非有や人間以外のものを測る用には立たぬ。

愛國者曰く、「ですがね、わがロシアのマカロニはイタリヤのより上等ですよ！ 論より證據ですて！ いつぞやニースで鱈魚料理てかざめを出された時にや、思はず泣きたくなつたです

よ！」そしてこの愛國者は、自分が胃の腑だけの愛國者であることに気がつかなくつた。

不平家曰く、「一たい七面鳥は食べ物でせうか？ 一たい筋子イクラは食べ物でせうか？」

大さう聰明な、學問のあるお嬢さん。彼女が海水浴をしてゐるとき、その狭い骨盤や、瘦せ細つた貧弱な腿を見て、彼は彼女が嫌ひになつた。

時計。錠前屋のエゴールの時計は、まるでわざとのやうに意地悪く遅れたり進んだりする。いま十二時を指したかと思ふと忽ち八時を指す。中に悪魔でも棲んでゐさうな意地の悪さである。錠前屋は原因をつかまうと思つて、あるとき時計を聖水に漬けて見た。……

昔の小説の主人公（ペチョーリン、オネーギン）は二十歳だった。だが今日では三十から三十五歳よりも若い主人公は使へない。やがて女主人公の方もさうなるだらう。

Nの父親は有名な人だった。彼も立派な人間なのだが、何をやつても皆がかう言ふ、「相當だね、だがお父さんにはまだまだ。」或るとき彼は藝術の夕べに出演して朗讀をやつた。ほかの連中はみんな好評だったが、彼だけはかう言はれた、「相當だね、だがお父さんにはまだまだ。」家に歸つて床に就くと、彼は父親の肖像を睨みつけて拳骨を振り廻した。

われわれは子孫を幸福にするため生活の改善に腐心する。しかし子孫は相變らずかう言

ふに違ひない、「昔は今よりよかつたなあ。今の暮らしは昔より悪くなつたよ。」

わが座右銘。——私はなんにも要らない。

今日では、きちんとした勤勉な人が自分や自分の仕事を批判的な眼で眺めると、世間からやれ愚痴っぽい男だとか、のらくら者だとか、厭世家だとか言はれる。ところがぶらぶらしてゐるいかさま師が仕事をしなけりやならんと叫ぶと、世間の人は喝采する。

女が男の眞似をして破壊をすると、人々はこれを自然と見、よく理解する。女が男の眞似をして創造を企てたり試みたりすると、人々はこれを不自然と見、怪しからんと言ふ。

僕は結婚すると婆さんになりました。

彼は己れの卑劣さの高みから世界を見おろした。

——君の許嫁は美人だなあ！

——いやなに、僕の眼にはどんな女も同じことさ。

彼は二十萬圓の富籤をつづけざまに二度抽き當てることを夢想してゐた。二十萬ではど

うも少ないやうな氣がするので。

Nは退職した四等官。田舎に住んで、齡は六十六である。教養があり、自由主義で、讀書も好きなら議論も好きだ。彼は客の口から、新任の豫審判事のZが片足にはスリッパを片足には長靴を穿いてゐることや、何とかいふ婦人と内縁関係を結んでゐることを聞き込む。Nは二六時ちゆうZのことを氣にして、あの男は片足だけスリッパを穿いて、他人の妻君と關係してゐるさうですな、とのべつに彼の噂話をしてゐる。そのことばかり喋つてゐるうちに、擧句の果には奥さんの寢間へでかけて行くやうにさへなる（八年この方なかつたことである）。興奮しながら相變らずZの噂をしてゐる。たうとう中氣が出て、手足が利かなくなつてしまふ。みんな興奮の結果である。醫者が来る。すると彼をつかまへてZの話をする。醫者はZを知つてゐて、今ではZは兩足とも長靴を穿いてゐるし（足がよくなつたので）、例の婦人とも結婚したと話す。

あの世へ行つてから、この世の生活を振り返つて「あれは美しい夢だつた……」と思ひたいものだ。

サンセイ

地主のNが、家令Zの子供たち——大學生と十七になる娘——を眺めながらかう思ふ。「あのZの奴は俺の金を^{くす}贓ねてゐる。贓ねた金で贅澤な暮しをしてゐる。この學生も娘もそれ位のこととは知つてる筈だ。もしかだ知らずにゐるのなら、自分たちがちゃんとした風をしてゐられるのは何故かといふことを、是非とも知つて置くべきだ。」

彼女は「妥協」といふ言葉が好きで、よくそれを使ふ。「私にはとても妥協は出来ませぬわ。……」「平行六面體をした板」……。

世襲名譽公民のオジャブーシキンは、自分の先祖が當然伯爵に敍せられるだけの権利のあつたことを、人に納得させようといつも懸命である。

——この途にかけちや、あの男は犬を食つた(通曉してゐるの意)ものですよ。

——まあ、まあ、そんなこと仰しやつちや駄目よ。家のママとても好き嫌ひがひどいの。

——私、これで三度目の良人^{とと}なのよ。……一番はじめのはイヴァン・マカールイチつて名でしたの。……二番目はピョートル……ピョートル……忘れちやつたわ。